

侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～

原作 AL 漫画 GEN

7



侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～

原作 AL 漫画 GEN

7





C O N T E N T S



第 26 話
禍界より出ずるもの
003

第 27 話
ニューネリーを守護するもの
021

第 28 話
主祖の力
045

第 29 話
戦後
091

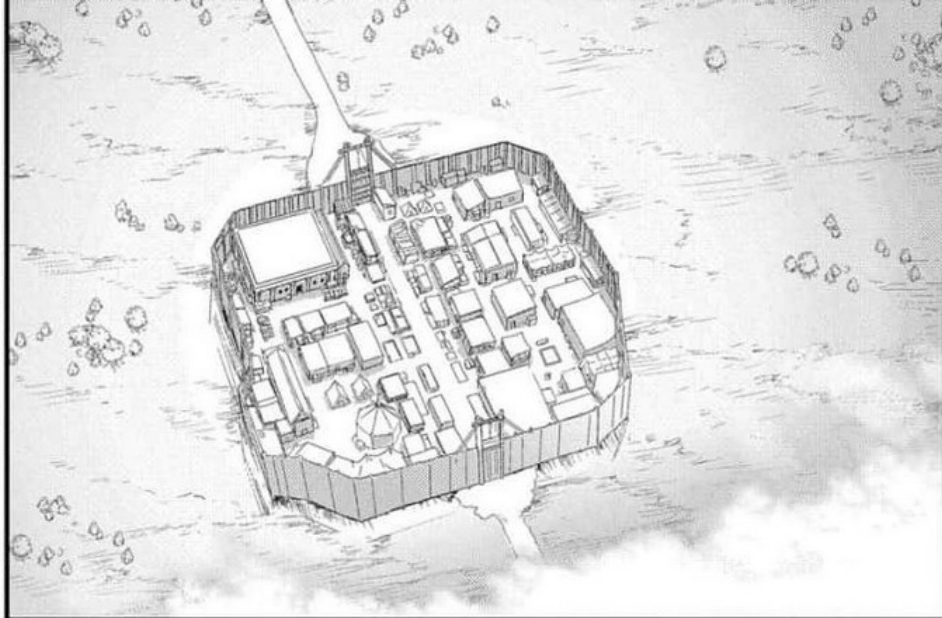
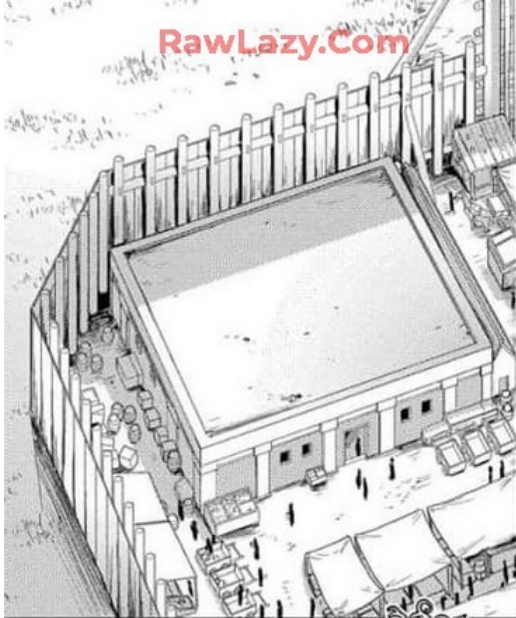
第 30 話
心揺れる女冒険者をおいしくいただく
111

第 31 話
市内の様子
149

コミカライズ記念書き下ろし短編小説

魔禍
167





ぼうけんしゃ
冒険者
ドニフ



お世話
になりました

はい

ぼうけんしゃ
冒険者
リヴァン



ちよつとは
げんき
元気になった？

しお
塩ギルド所属員
ハティ



.....
な

何!?

魔獣退治して
魔石集め
がんばり
頑張ります

そう
しつかり
稼かせ

あした
明日からまた
しばらく
フィールド入りです



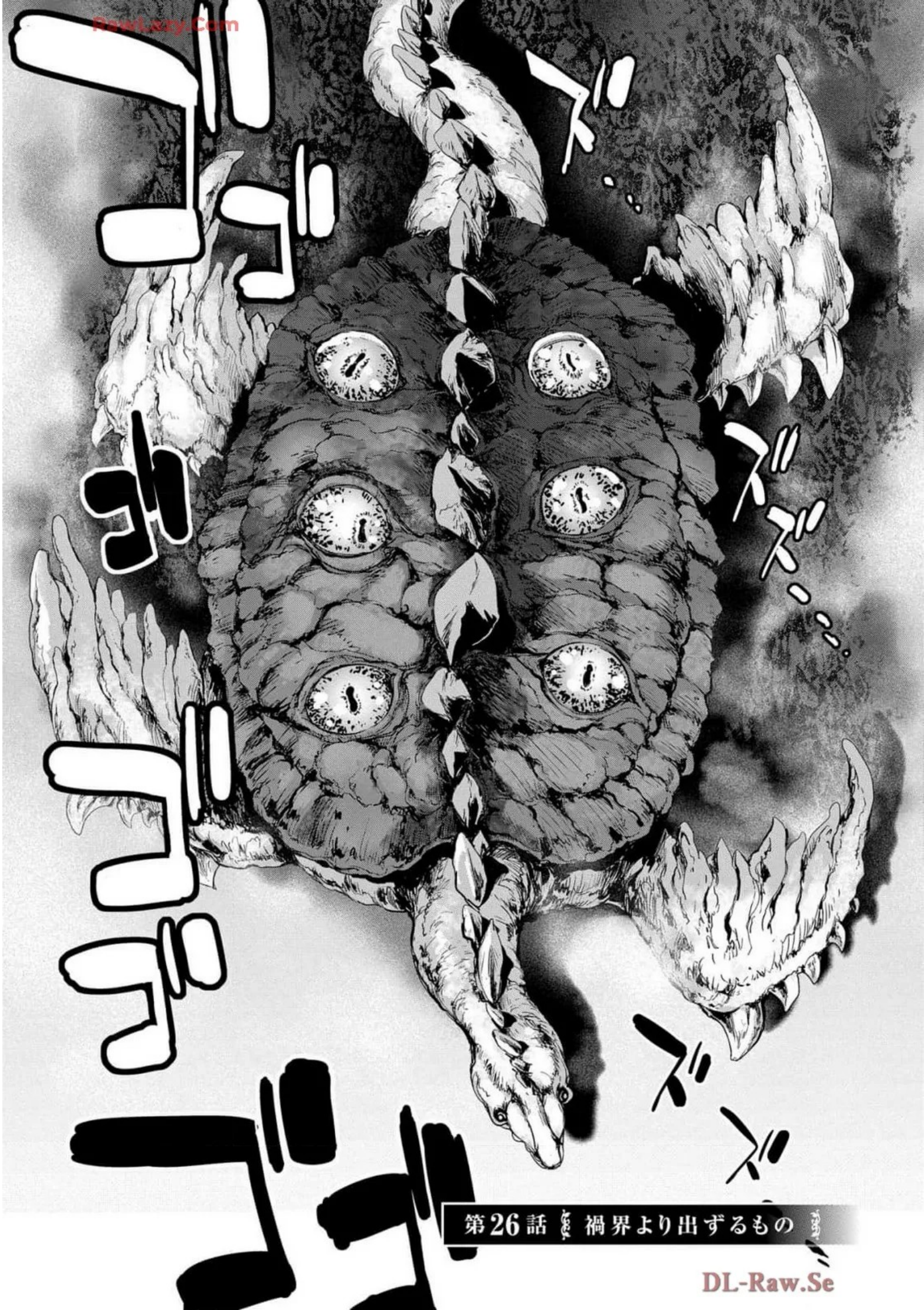
成熟
魔獣……？

まさか
……

いやいや
そんなハズは
ないからな

……は？

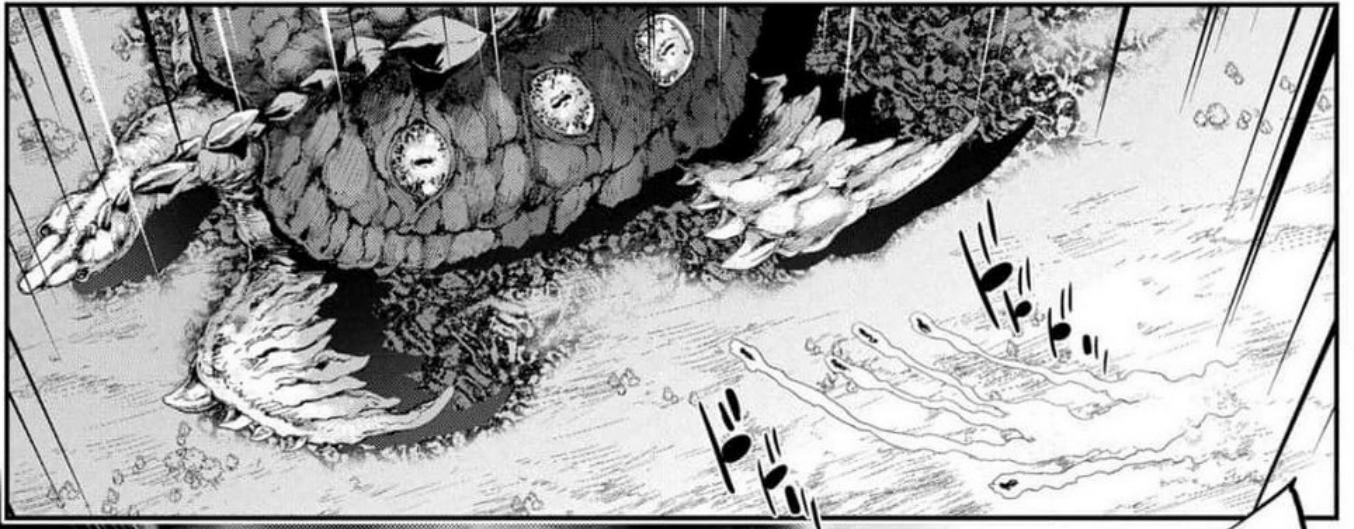
え？
何……？











まちが
間違いであって
ほしいな……

二位といえ
ば300年前の
カリエステー
ベと同じ脅
威階級だぞ……！

とうじ
当時ニュー
ネリーを
統治して
いた
オス
ローグ
家が

たたか
戦いで多
くの血を
流し
その命
脈を断
つこと
にな
ったと
いう……！
穢れた
羽根の
魔獣！！

……くっ

おい
震えてん
じゃ
ねえぞ

うるせえ！
武者震いだ！！



……オスローグ家と
おなじようになって
たまるかよ

ああ

そのために
俺達がおれたち
ここに
来ているんだ



こいつの闘型は
なんだろうな？

わからん
だが見た目は
巨大な亀のようだ

水生生物に似た姿の魔獣は
汚染型の闘型が多いとも
言われている…



：汚染型といえは
魔獣アルクノアだが

奴は第五位だ

第二位相当の魔獣が
汚染型なら悪夢だな
リデア平野全域が
穢土に染まりかねん

あれより凄まじい
汚染になるのか……







まずいな…

ニューネリー市に
真っ直ぐ進んでやがる



……成熟魔獣の中には
先祖の殺戮を第一に
考えるタイプもいる

ニューネリー市でなく
ニューネリー城を
狙っているとしたら…

!!

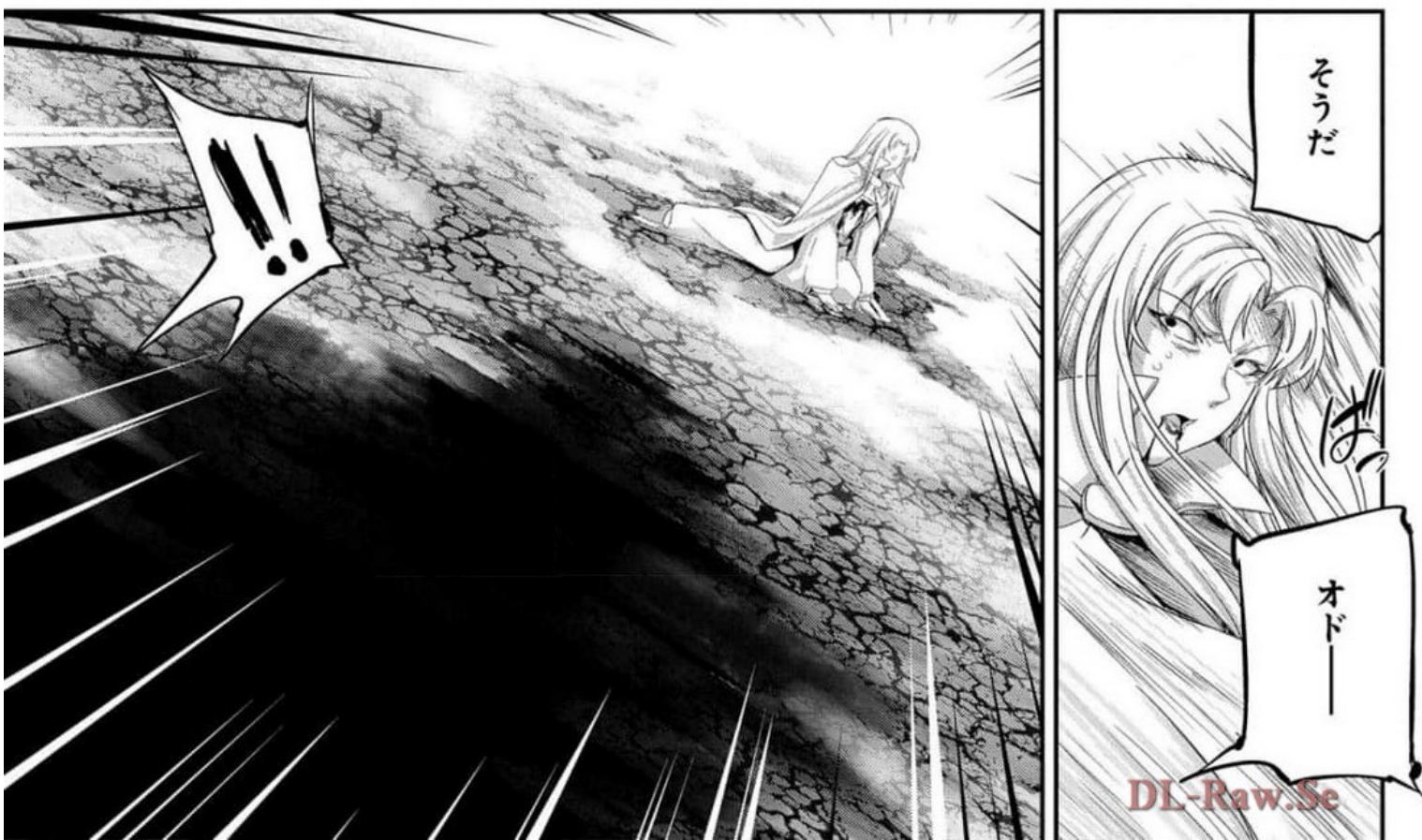
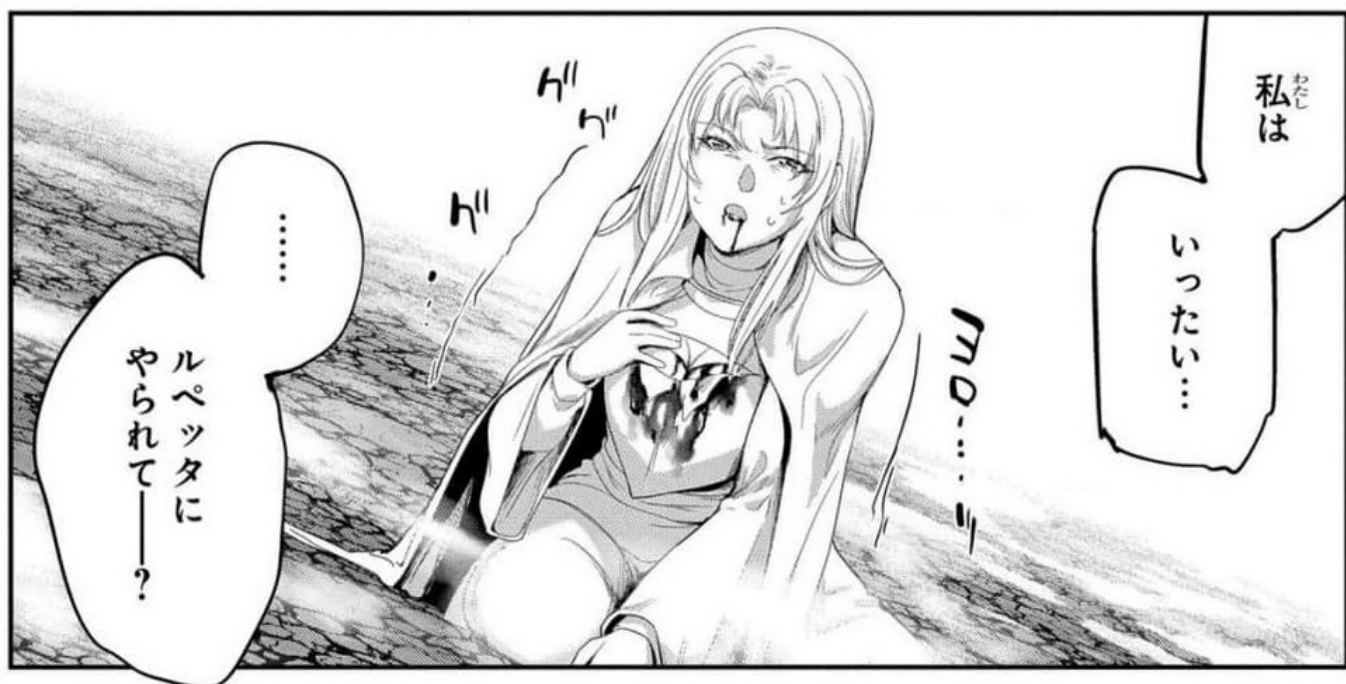
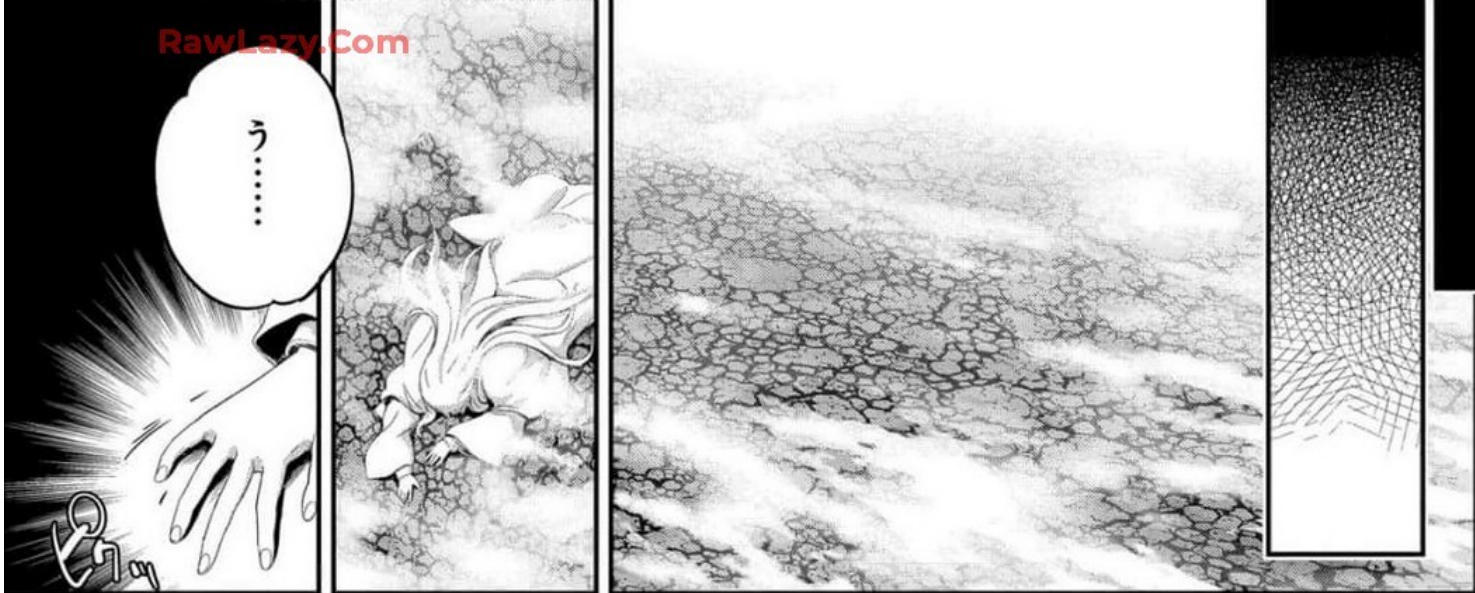
旦那様達の
魔力を感知している
ということか!?



ひとまず
急ぎ戻って
報告だ

誕生直後だからか
動きは鈍い!

まだ対策を講じる
時間はある!



この凄まじい
おせん
汚染は……

……ふ

ふふふ
そう……

産まれたのね！
せいじゆくまじゅう
成熟魔獣が！

オドルライト様
祝福の子を

喰らって！！

テロトリス様

オドルライト様を使って
従祖を量産するという
当初の計画こそ果たせ
ませんでした

ディアナは
やりました！

これで忌々しき
塩の都の
偽りの栄華は
崩れるでしょう！！

汚染は
こっちから
伸びているぞ

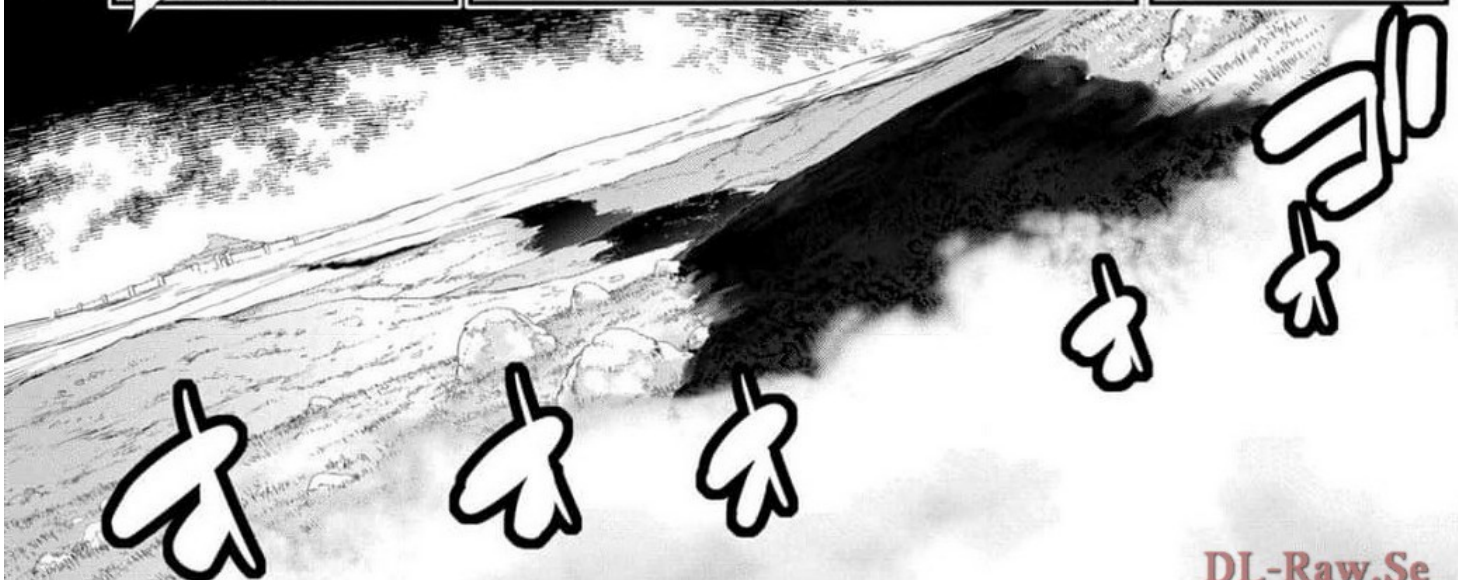
人の声
が
しなかったか？

クオルデンツエの
兵どもか……！

この怪我では

戦うことも
逃げることも…

う……っ





侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～



第27話 ニューネリーを守護するもの

あつ
まじゅう
魔獣の鐘だ

いいえ
おもおも
この重々しい音は
いつものじゃないわ

そうそう

くんれん
訓練の時の
鐘よね

せいじくまじゅう
成熟魔獣が
出た時に
鳴らす鐘だよ

……
成熟魔獣？

……なんで
成熟魔獣が
出るんだよ？

知るかよ

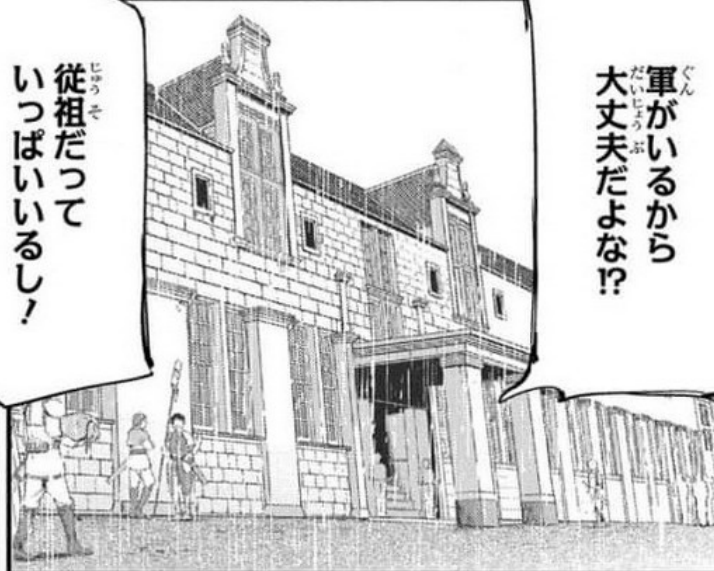
でも
この鐘の音は
成熟魔獣だぞ……

軍がいるから
大丈夫だよな!?

従祖だって
いっぱいいるし!

何よりお城には
クオルデンツエの
大守様が……

お貴族様が
いる!



お貴族様は
強いんだ!

成熟魔獣だって
倒せるさ!

そ
そうだ

そうに
違いがない!!



でもよ

エルシニアの禍では
そのお貴族様が
ゴロゴロ死んだって
話じゃねえか

2年前を思い出せ!
大魔獣エルシニアは
レヴィオス王家でも
討伐できなかった!

幸いあの時は
ニューネリーには
襲来しなかったが……

まさか今度こそ
他領から大魔獣が
来たっていうのか!?





お……

俺^{おれ}らなんて……

お貴族^{おきさく}様が死ぬ^{しぬ}なら……

もっと

死ぬ^{しぬ}……ぞ……



うわああああああ
おわりだあああああ

いやあああああ

キヤアアアア

あのときの
エヴェナピスの領民^{りやうみん}は
悲惨^{ひさん}だったと聞くぞ！

なにっ
今^{こん}度は隷祖^{れいそ}も
奇病^{きびよう}にかかるのか？！

本当^{ほんとう}かっ

俺^{おれ}達^{たち}もやべー！

もうニューネリーは
おしまいだああああ！！

ニューネリーを捨て^すて
逃^にげるんだああああ！！

パニックに
なる前に
抑え込むぞ

まずいな

デマが
飛び交っている

おいお前達
何を騒いでいる！

鐘を聞いた
だろう！

地区ごとに定められた
集会所へ早く避難しろ！

へい
兵隊さん

我らはこれより
この地の守護者として
魔獣討伐戦に臨むが……

この庇護が無用ならば
止めはせぬ
今すぐに出ていくがよい

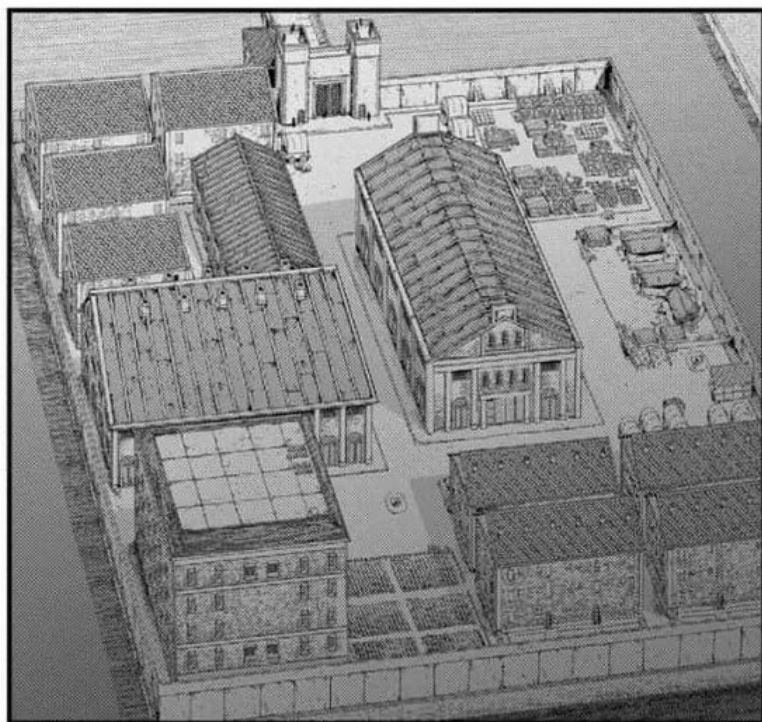
隸祖の力でこの困難を
乗り切れるのならばな

そそれは……

でも魔獣が
来たら……

何をしておる！

どこに避難
してもよい















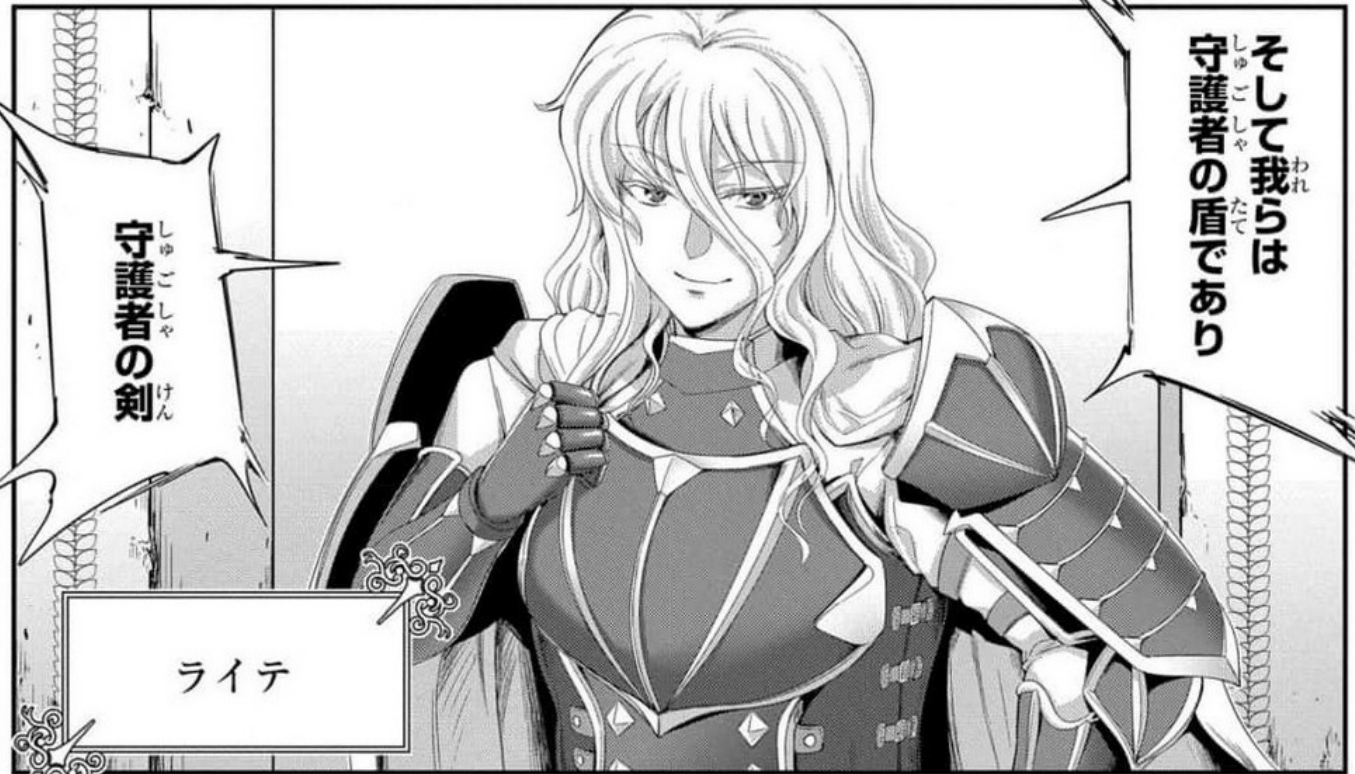








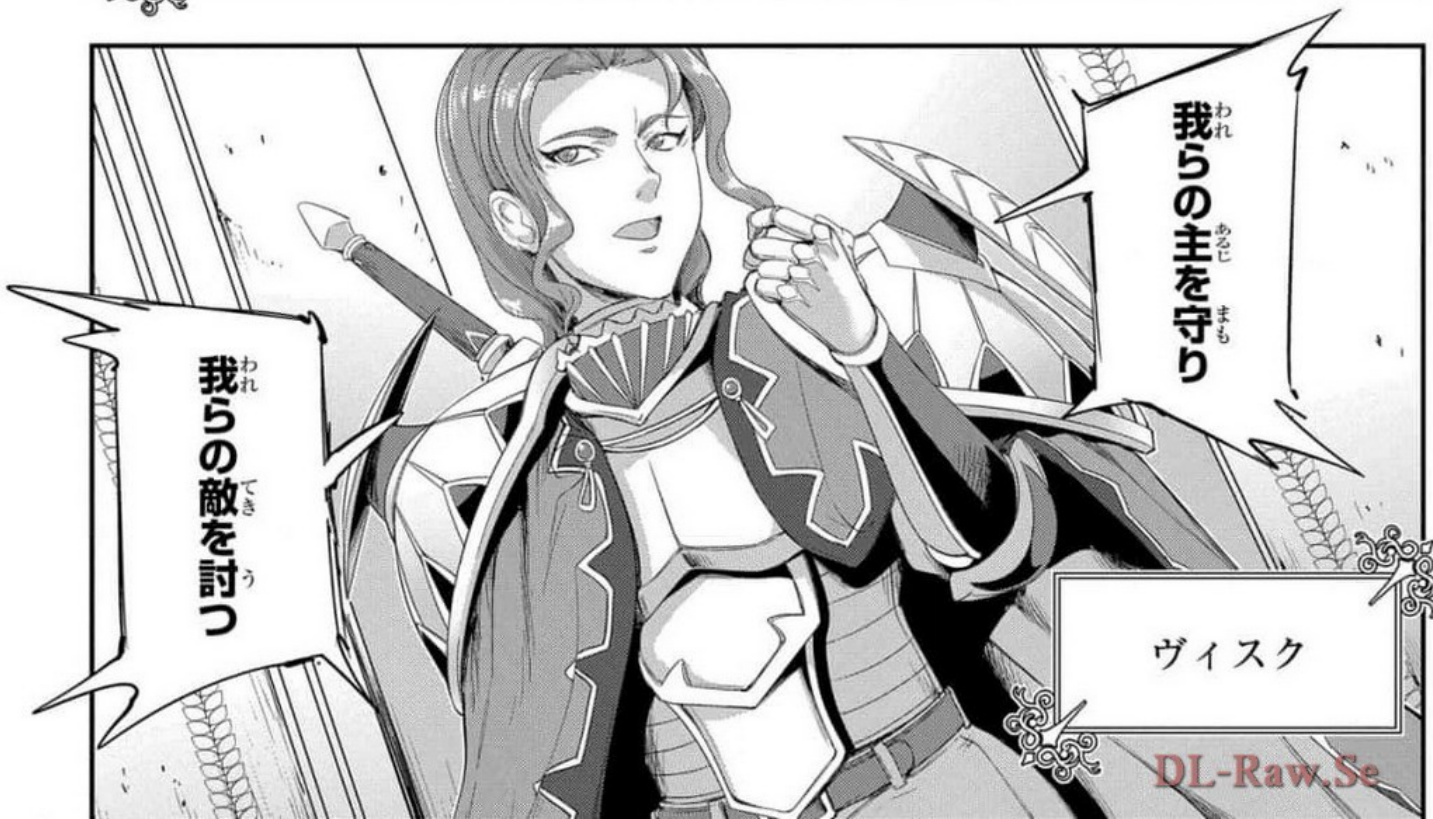
その通りだ



そして我らは
守護者の盾であり

守護者の剣

ライテ



我らの主を守り

我らの敵を討つ

ヴィスク















ほう

ウィルクも
言うように
なったものだ

：たまに奇行は
み見られるが

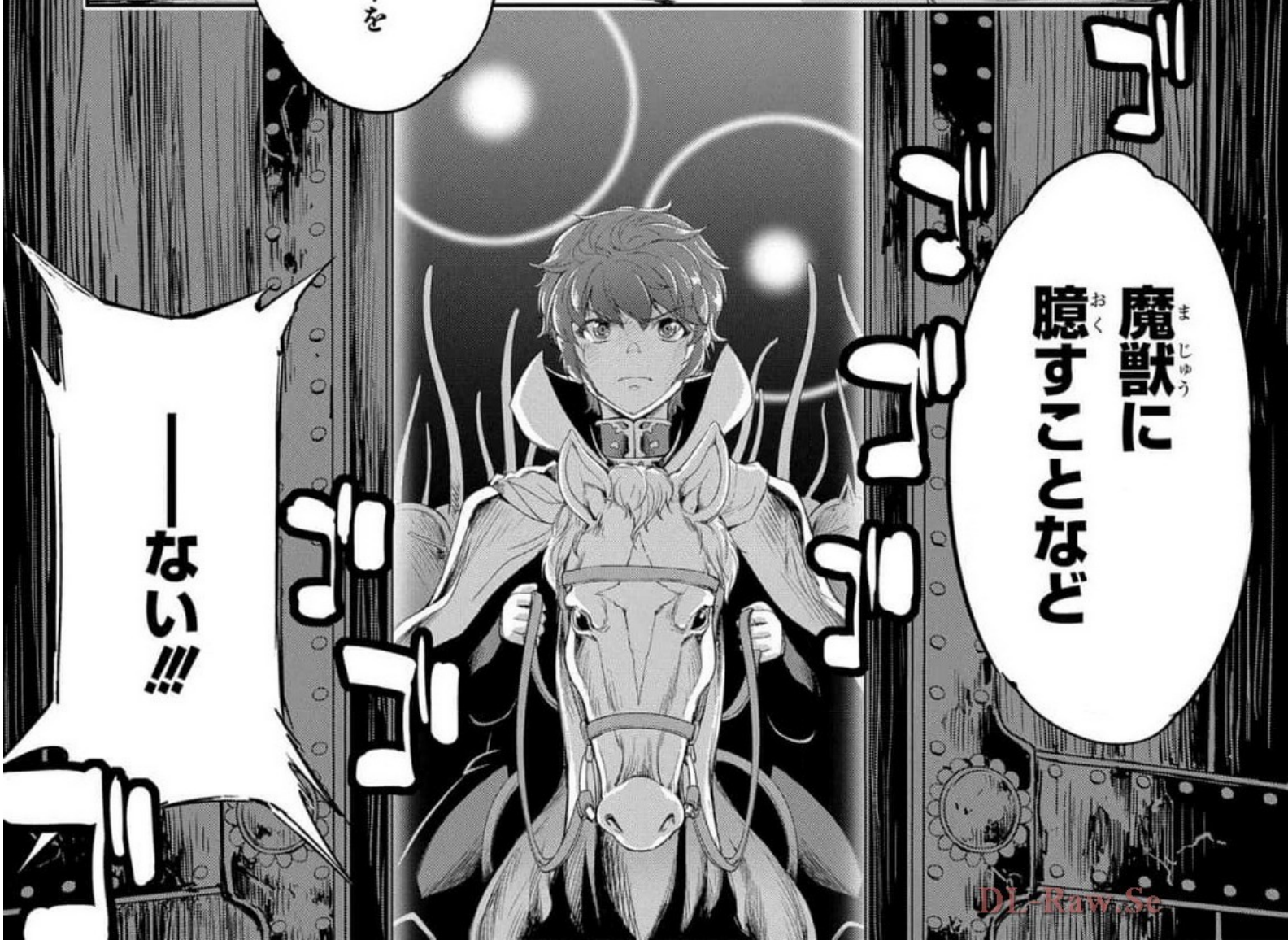
やはりウィルクにも
クオルデンツエの血が
なが流れているようだな



そう



我らは元来
ニューネリーを
守護する者



魔獣に
臆すことなど

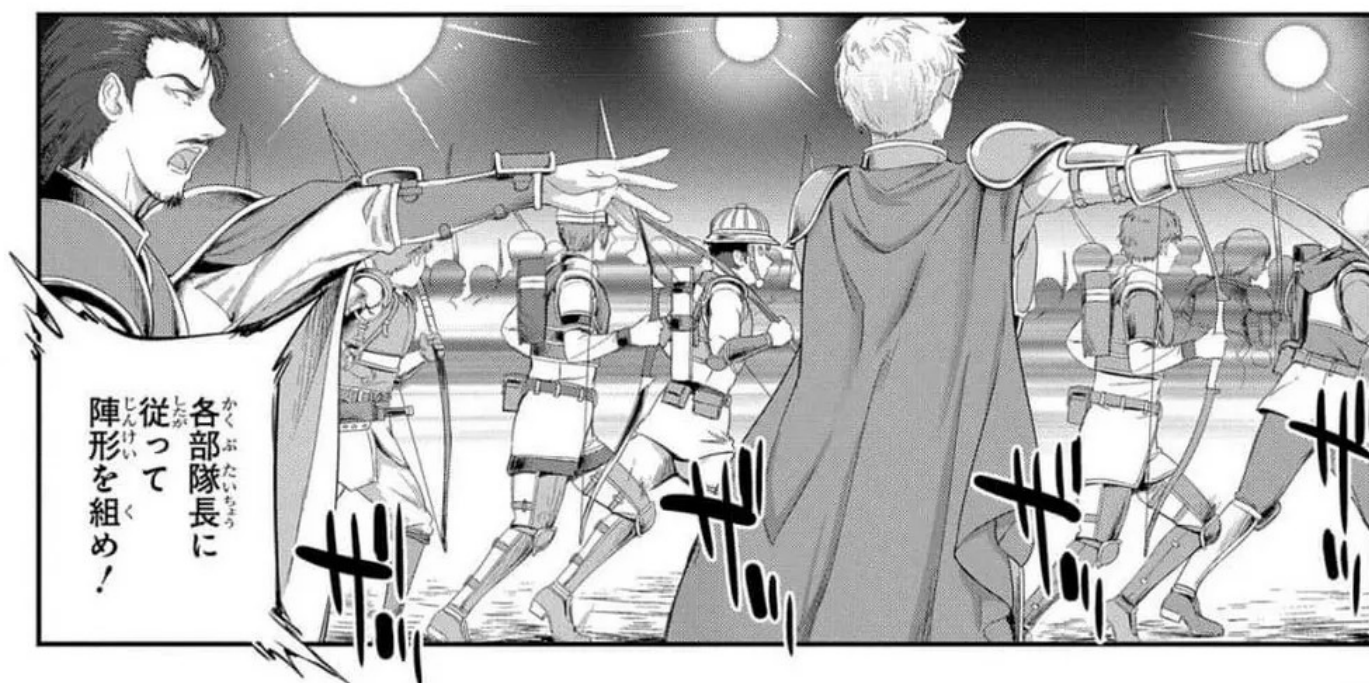
— ない!!!



侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～







狙^ねいは

主^オ祖^レの
よう^ダだ

第28話 主祖の力

転生してから俺は
たびたび前世地球の
貴族に思いを馳せていた

彼らの権威の源とは
いったいなんだった
のか？……と



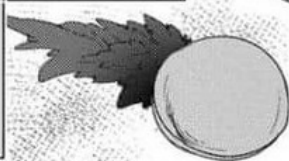
血筋や家系によるもの
信仰を背景にしたもの
あるいは類稀な個人の
資質によるもの……

色々
あるだろう

だがエルオ大陸で生きてみると
それらの根拠はとも不安定な
ものに思えてくる

地球では服をひん剥けば
平民も貴族も同じ人間だ
その血に高貴も下賤もない

「偉いから偉い」
地球の貴族達は
そんなトートロジーに
支えられていた気がする



貴族制が民衆に
打ち倒されていった
歴史を考えても

一歩間違えば
簡単に崩壊する
権威である



いっぽう
一方で
エルオ大陸の
貴族はシンプルだ

「強いから偉い」

とても
わかりやすい

平民とは
別種と言えるほどに
乖離したその力こそが

貴族を貴族たらしめて
いるのだ

病気にほとんどならず
強靱な肉体と生命力を誇り
強力な魔法を自在に操る

そして
エルオ大陸の歴史は
人類と魔獣の戦いの
歴史でもある

天災ともいうべき魔獣から
身を守るために人々は
強力な魔力持ちの人間に従い
その支配下に入ってきた

つまり魔獣と戦い
打ち倒すことは
貴族の義務であり
矜持でもあるのだ

貴族たるもの魔獣から
逃げるわけにはいかない――



釣れたな

ほうこく
報告いたし
ます！

せいじくまじゅう
成熟魔獣が
わかさま
若様のほうへ
しんろ
進路を変更！

このまま
ニューネリーから
と
遠ざけるぞ

おのおのしんたいきょうか
各々身体強化を
はつどう
発動せよ！

ちようそくど
超速度で
いどう
移動するぞ！

あまり引き離すと
ねら
狙いが外れてしまうかも
しれませんね

まだこちらを
とら
捉えているよう
ですが

そうだな

ぜんたいと
全隊止まれ！
しょうきゆう
小休止だ

かなり小さく
ちい
なってしまうたな



魔獣から
目を離すな

最大級の
警戒をしろ

それにしても
すつトロい奴だな



あの魔獣……
呼びにくいな
『亀吉』でいいか

このまま奴と
鬼ごっこを続ける
というのはどうだ？

カーメ

キツシユ……？



確かに今は
のそのそと
動く程度ですが

誕生して
間もないけどと
考えたほうがいいです

成熟魔獣が
本調子になったら

そのようなことは
言ってられなく
なるかと……

同感です

闘型も
特定できて
いませんし

何より——

妖力が強大なほどに
潜在的な能力は高まります

奴は推定で第二位相当
カリエステーベ級魔獣

その妖力攻撃や災厄拡散は
我々にも経験がありません

第三位を相手にするのは
全く異なるものになるでしょう



強烈な先制攻撃で
大ダメージを与えて
妖力を削るべきかと

魔獣が臨戦態勢に
入る前……
今が最大の好機です

想像以上の緊迫と
主祖に対する非常に
強い期待を感じた

主祖の力なくしては
人は成熟魔獣に勝てない

その歴然たる事実を今
突きつけられた気がする



わかった



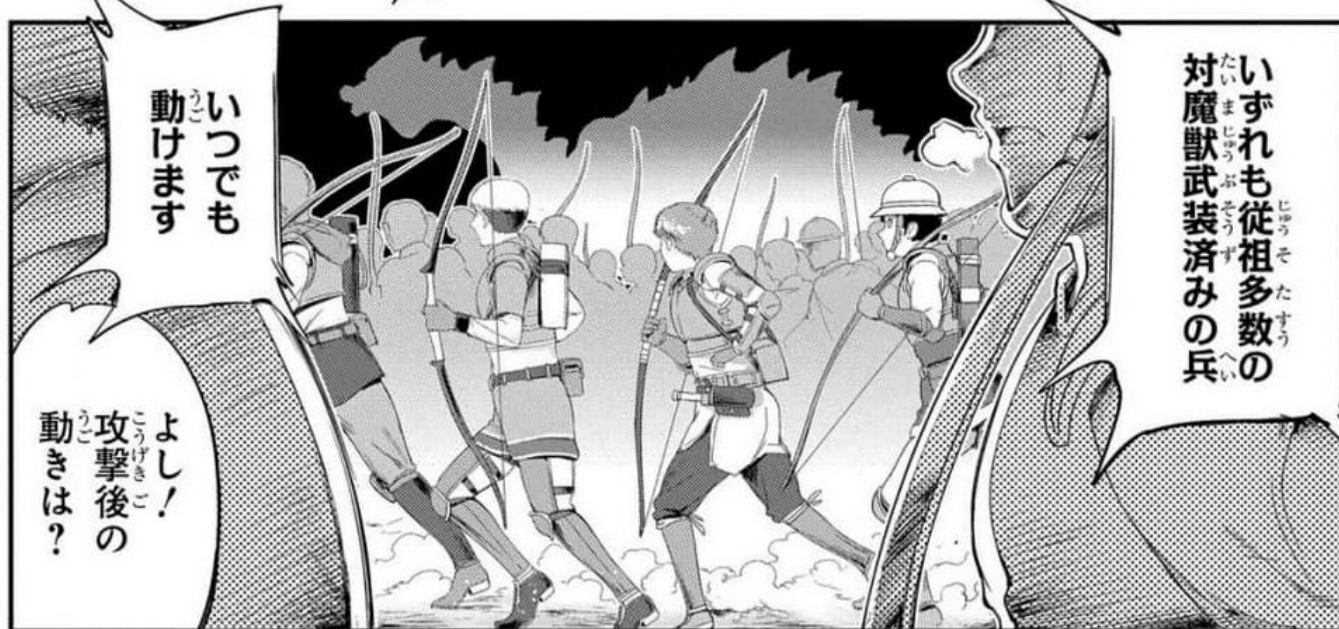
魔獣を挟み込む形で
展開しております



まずここで
一撃を叩き込む！

討伐隊は
いけるか！

はっ



いずれも従軍多数の
対魔獣武装済みの兵

いつでも
動けます

よし！
攻撃後の
動きは？

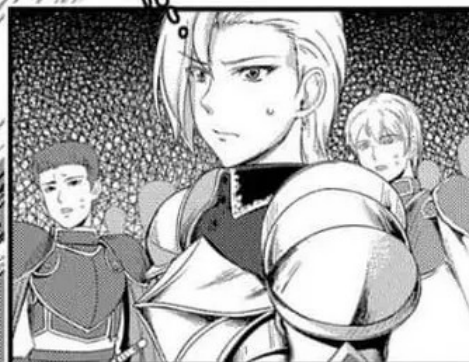


ニューネリー軍事基地では
交換用の部隊も編成中です

領内各地からも
兵が集結中でしょう

成熟魔獣との戦いは
数日から数週間といった
単位になりますので
増援の手配は万全です

ああ







奴の
動きが!?

!?

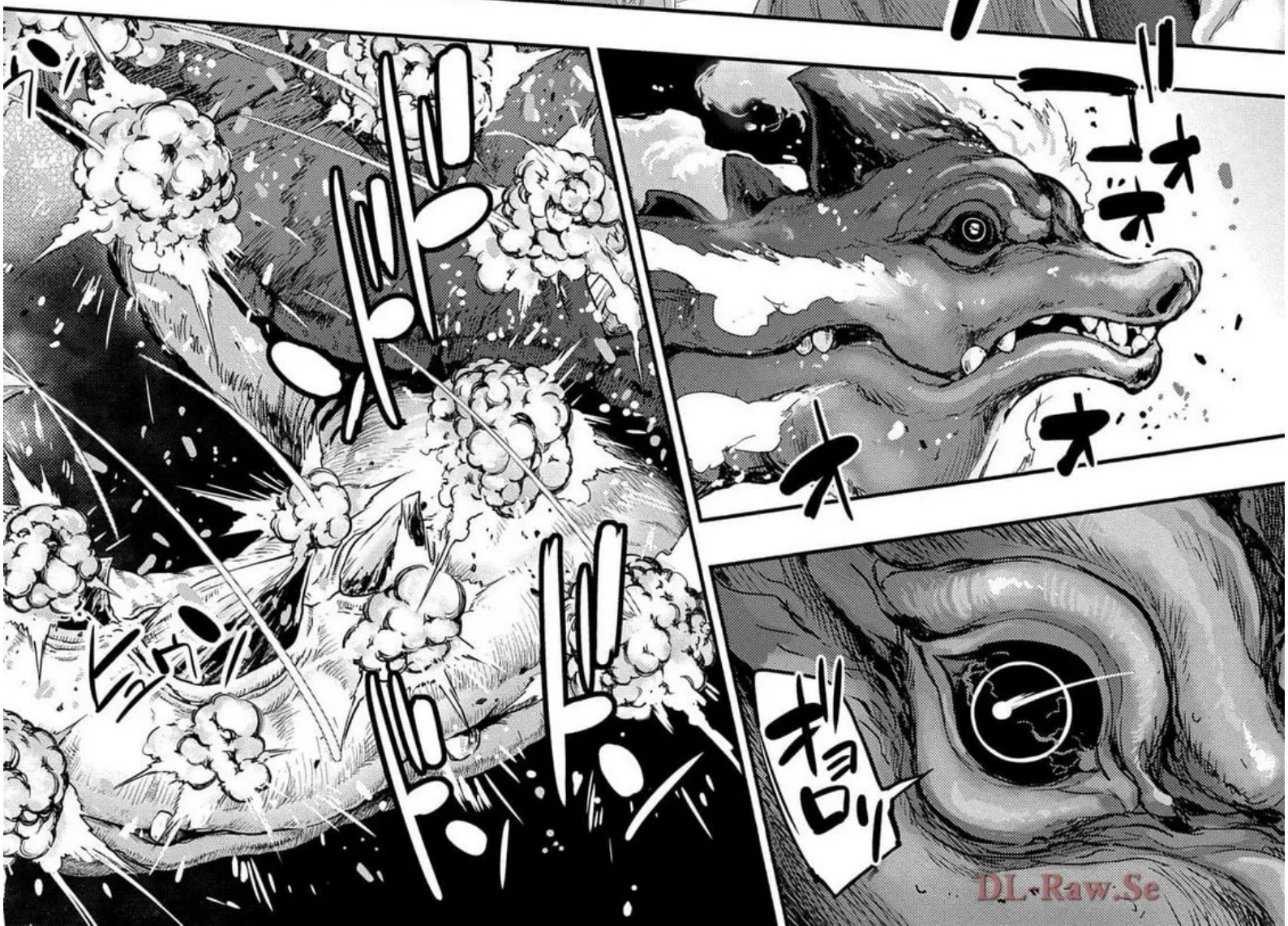
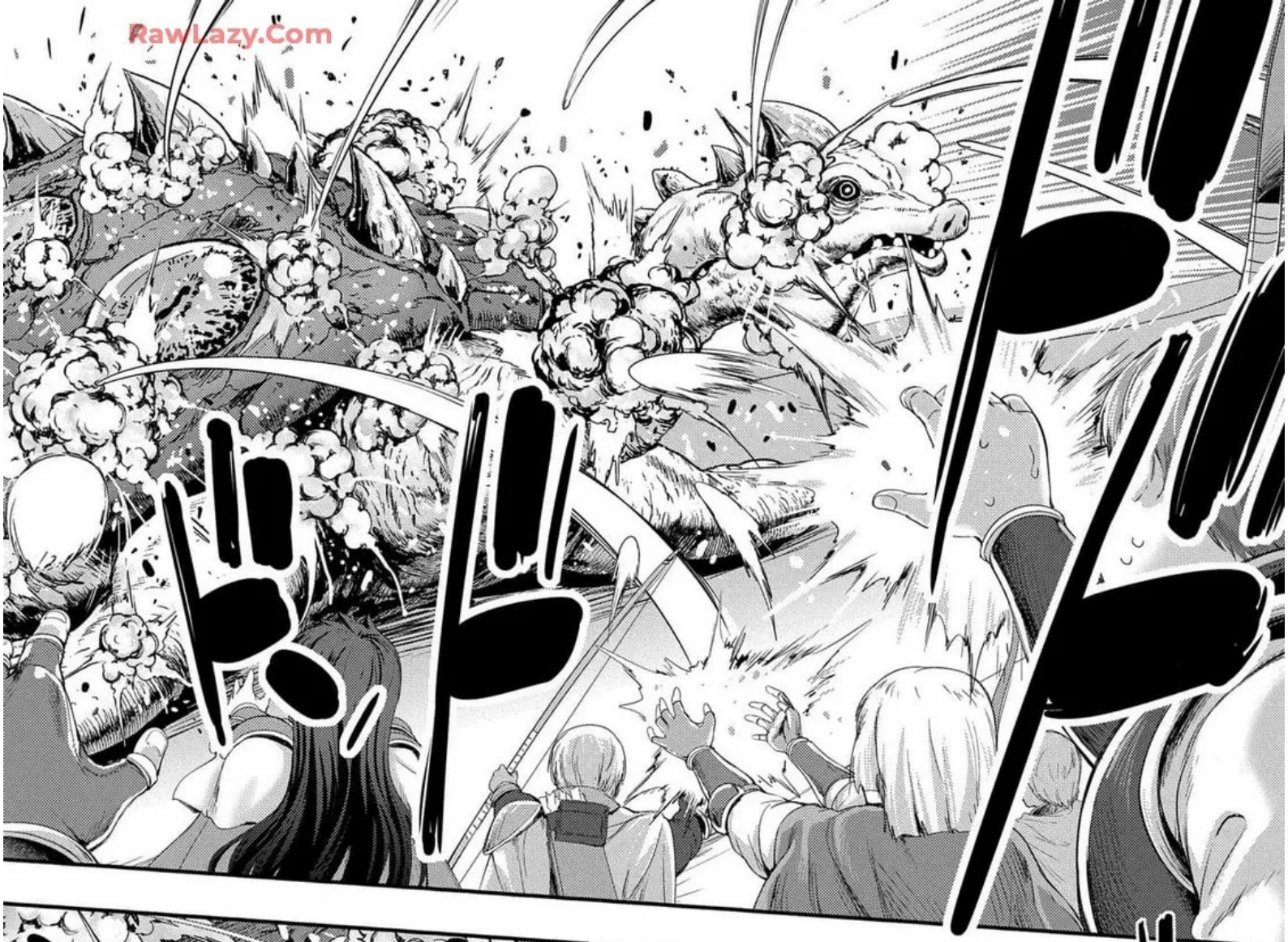






注意を
引き付けろ!!

手を止めるな!





わかさま
若様ツ!!!

いま
今です!!!!

セーラー















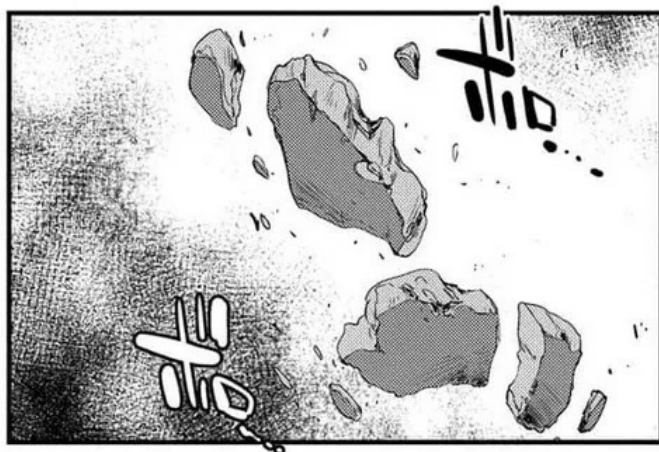






ここまでの超火力で
生き物を攻撃したのは
初めてだが……

主祖やばすぎだろ
人間兵器すぎる



甲羅らしき部分が
崩れていきます

魔力攻撃による
腐食反応と
思われます

叩き込んだ魔力が
毒のように作用
しているのか……

止まるか？





ピンピンして
やがる!?

信じられん……!

いや! 待て!
あちこち
ボロボロだ!

わかさま
若様の攻撃が
効いてるぞ!

よっしやああ!!

この後また
わかさま
若様の攻撃が
あるんだよな!?

ああ
そうだ!

さっきのが
また来るなら
なんとかなるぞ!



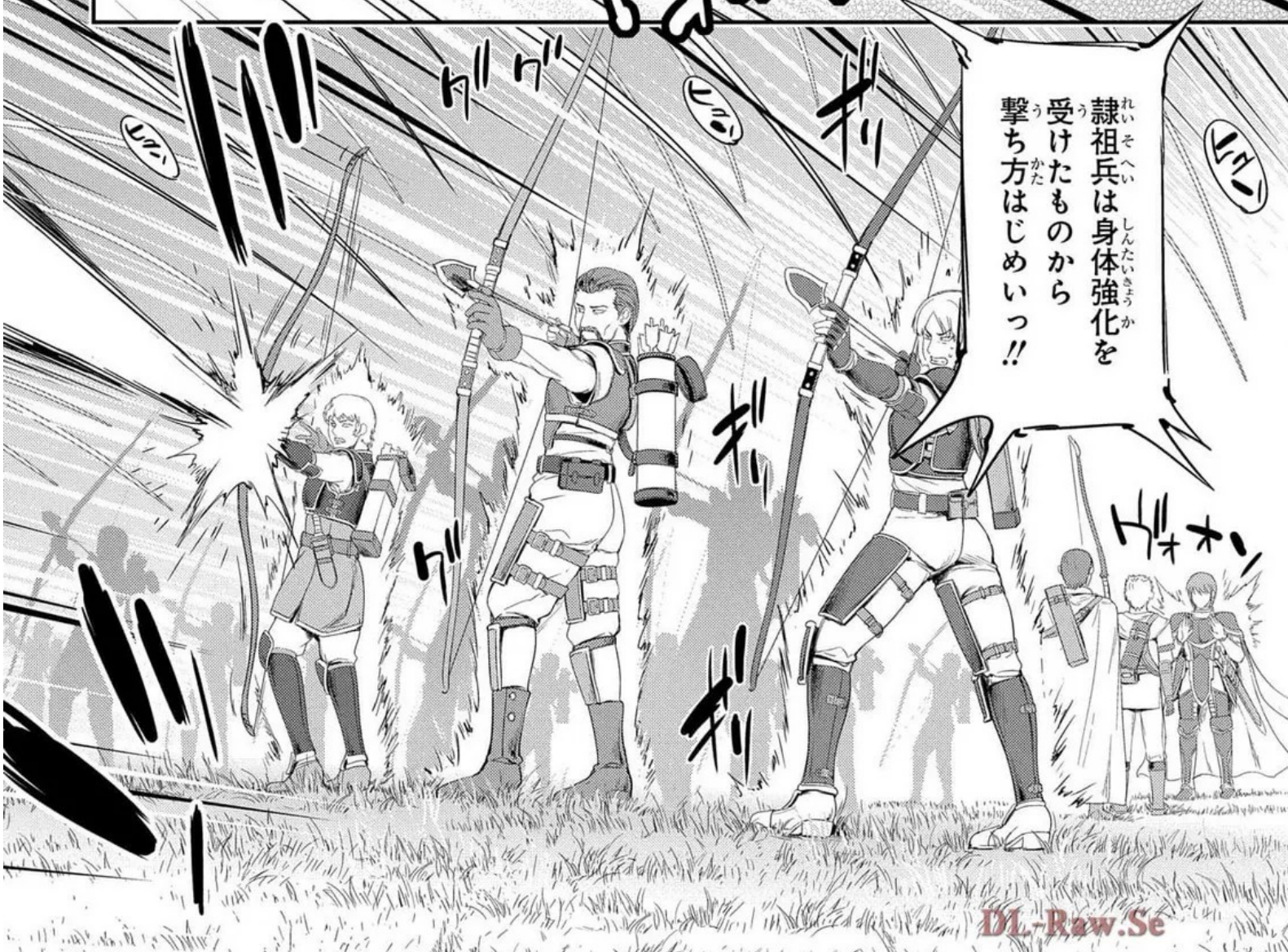
魔獣を
倒せるのは
わかさま
若様だけだ!

死ね気で
引き付けろ!



從祖兵!
じゅうそへい

魔法攻撃
まほうこうげき
はじめっ!!



隸祖兵は身体強化を
れいそへい しんたいきようか
うけたものから
撃ち方はじめっ!!
うちかた





まじゅう
魔獣がこちらを
む
向きます

ウーン

!



















なに

ちよつと
疲^{つか}れたただけだ

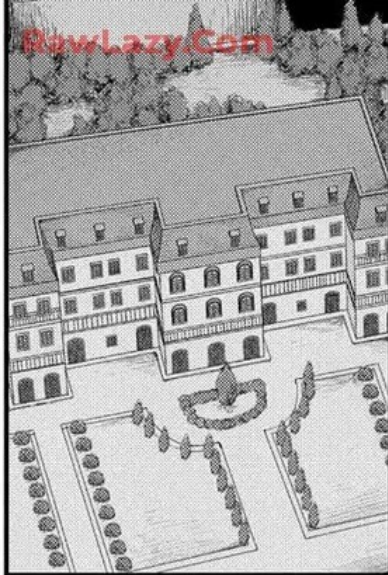
ギリギリなんとか
なったな……



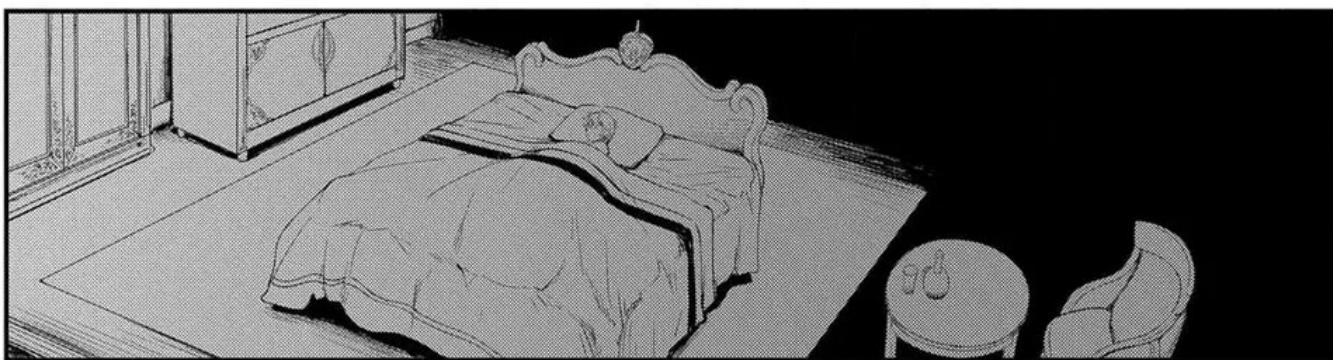
侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～





第29話 戦後



む……

ふ……

ぐっすりと
休むつもり
だったが

戦闘の興奮の
余韻もあつてか
いまいち
眠れなかった



ふぁ～あ…

……まだ
日の出前か

魔獣討伐より
数時間経った
ぐらいか？

かめきち
かり
亀吉(仮)
討伐戦
とうばつせん

へい
じゅうけいしゅうしや
兵に重軽傷者が
なんにん
で
何人か出たものの

さいわ
しいなことに
死者はゼロ

こうだい
広大な
ニユーネリーフィールドから
ばくたん
せいきくまじゅう
爆誕した成熟魔獣としては
いれい
異例とも言える軽度の損害だ
そんがい

てまえ
フィールド手前の
ぜんせんきち
前線基地のほうが
けがにん
怪我人は多かったらしい
おお

せいじゅうまじゅう
ちなみに成熟魔獣は
しゅうしんち
出身地のフィールドに
でても
出戻りすることはない

そのため
フィールド内部に
ひなん
避難するという手もある

まじゅうとうばつご
魔獣討伐後の後始末は
ぐん
軍の隊長達に
まか
任せてあるため

おれ
俺はもう
やることがない

それにしても

……我ながら
すさまじい力
だったな

わかっていた
つもりだったが

先祖……中でも
俺の力は

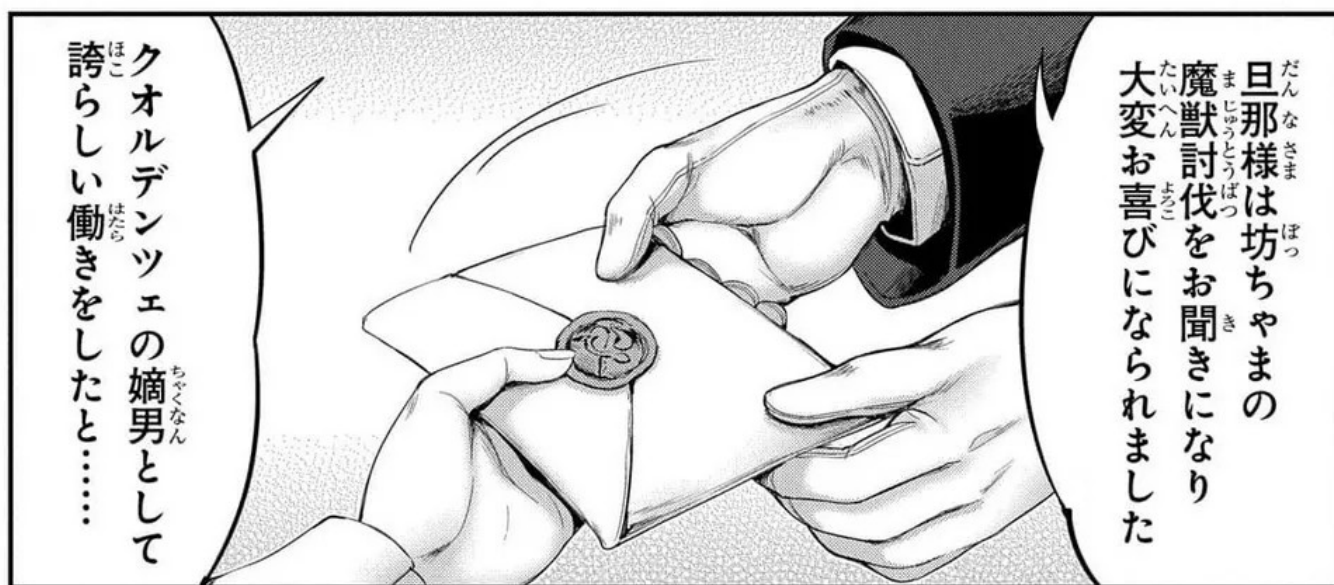
おそろしいものだ
と再確認した



旦那様から
お手紙が
届きました

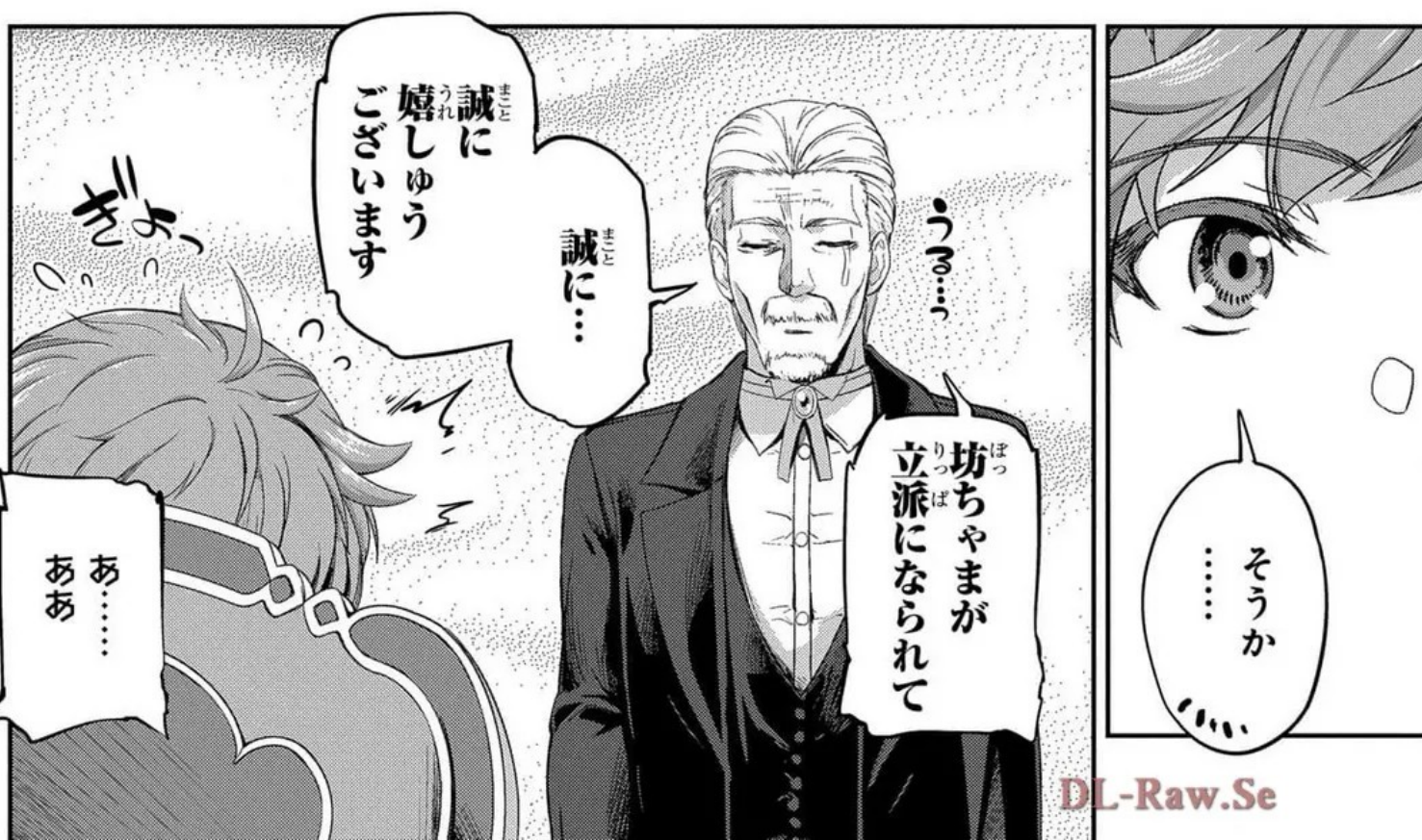
坊ちやま

ご苦労



旦那様は坊ちやまの
魔獣討伐をお聞きになり
大変お喜びになりました

クオルデントツエの嫡男として
誇らしい働きをしたと……



う……

誠に……

誠に
嬉しゅう
ございます

坊ちやまが
立派になられて

そうか
……

ああ……
ああ

てがみ
手紙には惜しみない
しょうさん
称賛の言葉が並んでいた

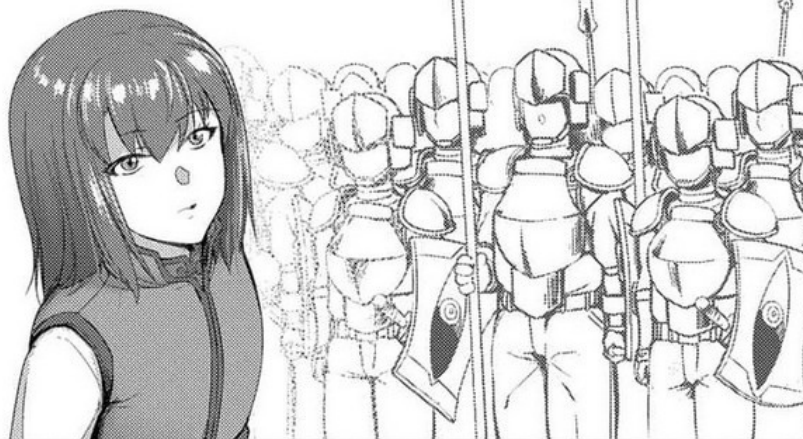
せいじやくまじゅう
成熟魔獣の討伐は
きぞく
貴族として
さいこう
最高の名誉なのだ



ちゆうさぎ
そして調査のため
フィールドに
ぐん
軍を送り込むこと

ぐん
その軍にルペッタを
どうはんぱう
同行させること

つづ
……と続いていた



かた
ルペッタの
つた
語った事件を
つた
伝えたところ

ちち
父は重要だと
はんだん
判断したらしい

すぐ
すぐにルペッタを
よびだ
呼び出すように
とうめい
父様からの
しじ
指示だ

ついでに
フィールドの現状を
かくにん
確認するようだ

かしこまり
ました



その中には
貴族でさえ
感染するような
恐ろしい病も
あるのだ

成熟魔獣は
未知の奇病を
撒き散らすことが
稀にあり

さてと……

面倒臭いが
返事を書かねば
ならない

下手をすれば
クオルデンツェ家で
パンデミック発生だ

俺は成熟魔獣を
目前にして
戦ったため

感染の
リスクがある

こうして父とも
手紙でやりとりを
しているのだ

それ避けるために
俺は城に戻らず
別邸で夜を明かし

俺は2年前の
エルシニアの禍の折に

凶悪な奇病を
魔力で押し
治療魔法で治した
実績がある



クオルデンツエ家から
死者は出なかったし

ニューネリー市に感染者を
集めて一斉に治療したため
騎士家や従祖兵の死者数も
他領に比べると
雲泥の差であった



とはいえ
念には念を

潜伏期間を考えると
しばらくは城に
戻れないので

このまま
ナンボナン市に
出発する

—と





父^{ちち}からの手紙^{てがみ}は

魔獣討伐^{まじゅうとうばつ}の
褒美^{ほうび}をあげるよ！
なんでも言^いってね！

何が
いい？

やはり
女^めか？

といったような文章^{ぶんしょう}で
結^{むす}ばれていたの

聖高教会^{せいこうきょうかい}に所属^{しよぞく}する
シンシアを処刑^{しよけい}する場合^{ばあい}

俺^{おれ}がニューネリー市^しに
戻^{もど}るまでは待^まってほしい



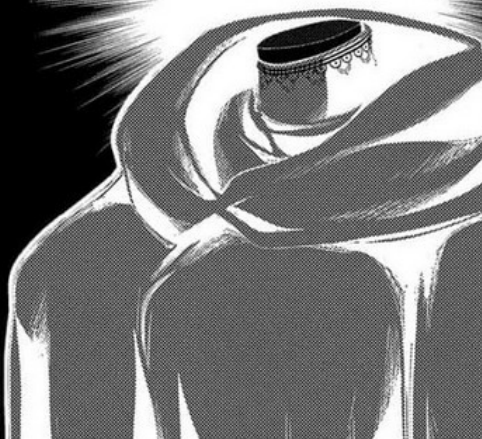
……と
願^{ねが}いしておいた

すぽーん

聖高会^{せいこうかい}の関係者^{かんけいしゃ}
というこ^{こと}で
連座^{れんざ}で処刑^{しよけい}される
可能性^{かのうせい}はゼロではない

帰^{かえ}ったら
シンシアの首^{くび}が
ありませんでした

というの^のは
勘弁^{かんべん}してもらいたい





せめて処刑前に
いっばつ
一発やりたいのだ

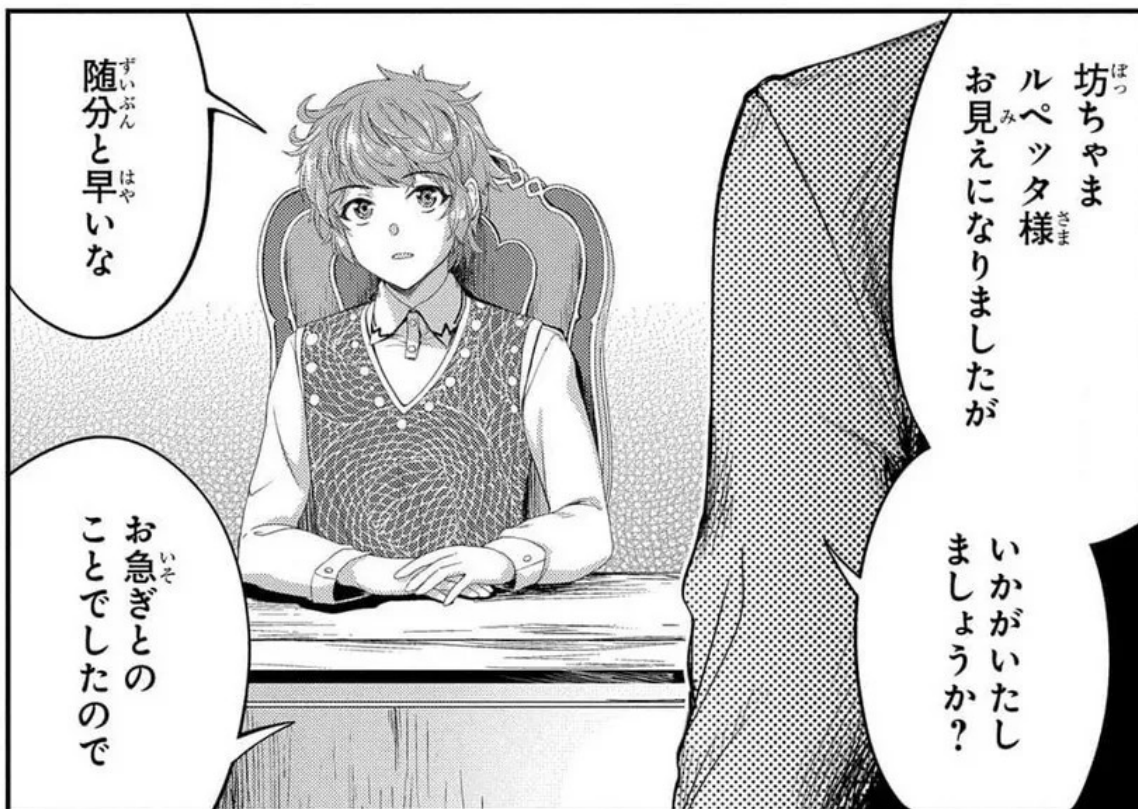


フと気が付くと
……朝立ちで
バッキバキになっていた

そういえば
禁欲2日目だったな……



む……



坊ちやま
ルペツタ様
お見えになりましたが

いかがいたし
ましようか？

随分と早いな

お急ぎとの
ことでしたので



入れ



それに確か
ルペツタは昨日――

ルペツタを軍に
引き渡すまで
まだ時間はある

なんでもします

——と
言っていたので

なんでもして
もらおう

わかった
とお
通せ

はっ

母^{はは}やファニー^{てがみ}へ
向^むけた手紙^{てがみ}は
今^{こんばん}晩にでもゆつくり
書^かくことにしよう——







ご
りようしゆさま
ご領主様の
しそくさま
ご子息様に……

いま
今まで
たくさんご無礼を
しました……

どうか
ゆる
許して
ください……

きようしゆへ
恐縮するルペッタには
もう
わけ
申し訳ないのだが

ふる
震える指先が見えて
かわい
可愛かった

しょうじんぶつ
小動物に似た
かわい
可愛さがある



……隊長殿

そうだ
いい子だぞ



いまさら
今更そのように
ちぢ
縮こまられても
こま
困る

いつも通り
たいちようどの
隊長殿で構わん

……ベッドの
うえ
上ではな



何よりも
恥ずかしがって
嫌がるルペッタに
股間が硬くなる



……少し前までは
あんなに汚なかったのに
今は気になるのか？

だって

一度綺麗にしたら
臭いのが目立つ……

お願い
お風呂を先に……



まあいい
用意させよう

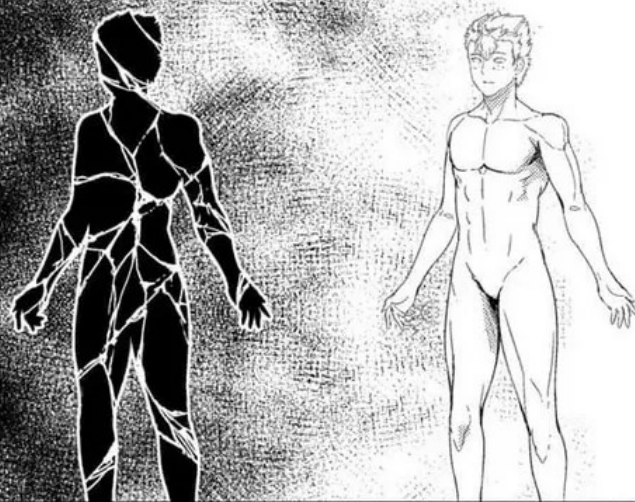
そういえば
メルギンは元気か？

はっ
はい

おかげさまで——

軍事拠点の
治癒師のおかげで
かなり回復したらしい

運のいいことに
肉体的な後遺症は
残らないそうだが



先祖と思われる男の
魔法攻撃によって
蓄積する魔力残滓で
後年になんらかの
身体障害が出ることは
充分に考えられるが――

隊長殿……

本当に
本当に
本当にありがとうございます……！

私……

誰も
頼れなくて……

なんでもするって

……
ルペッタ

昨日
言っていたな？

……うん



俺はおれは
ルベッタと



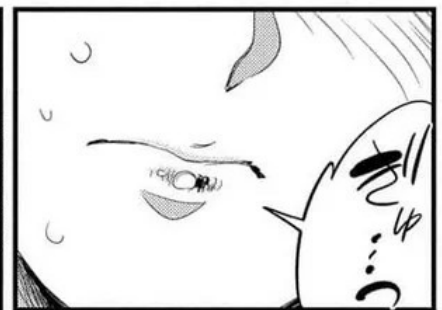
キスをしたい



侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～



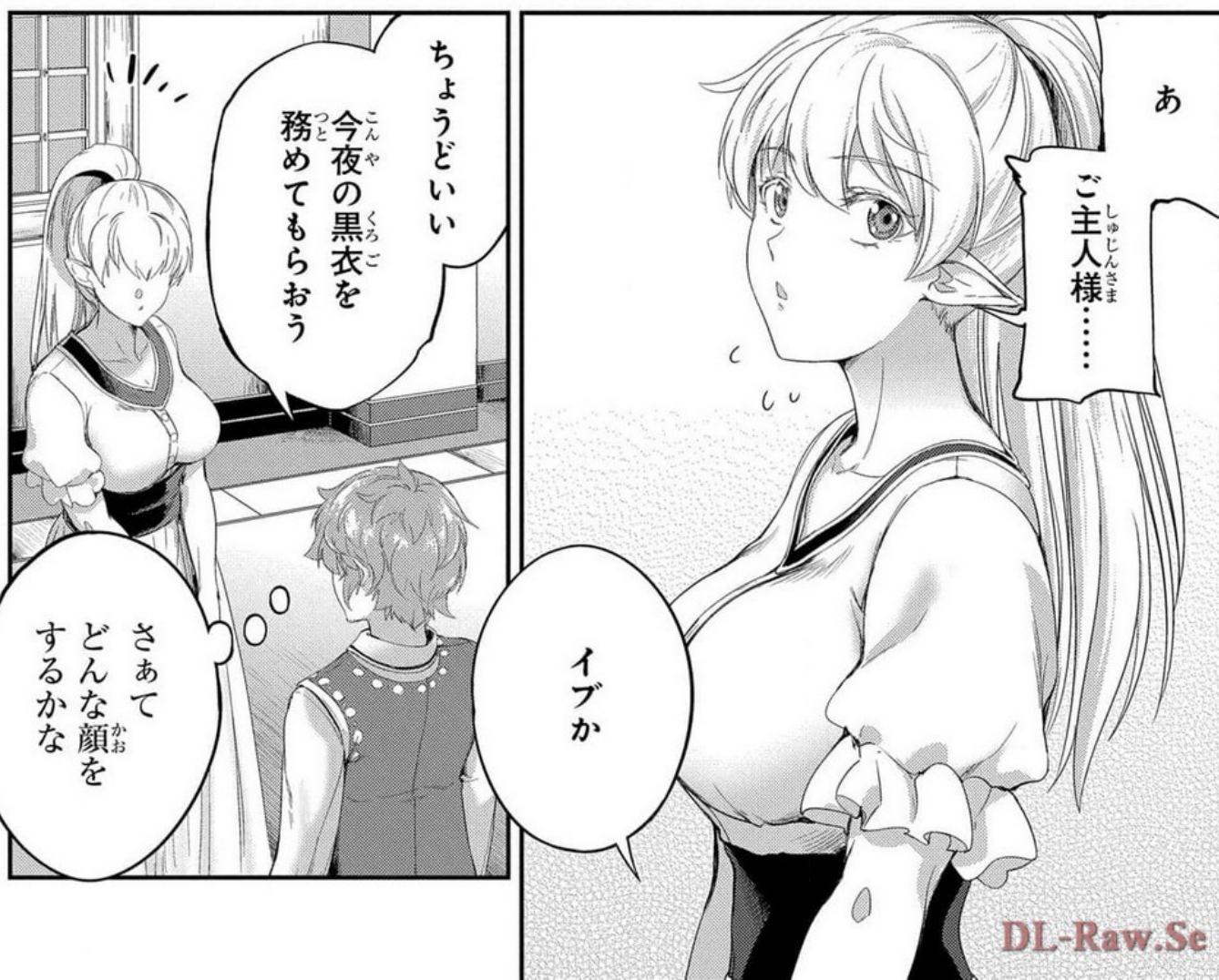




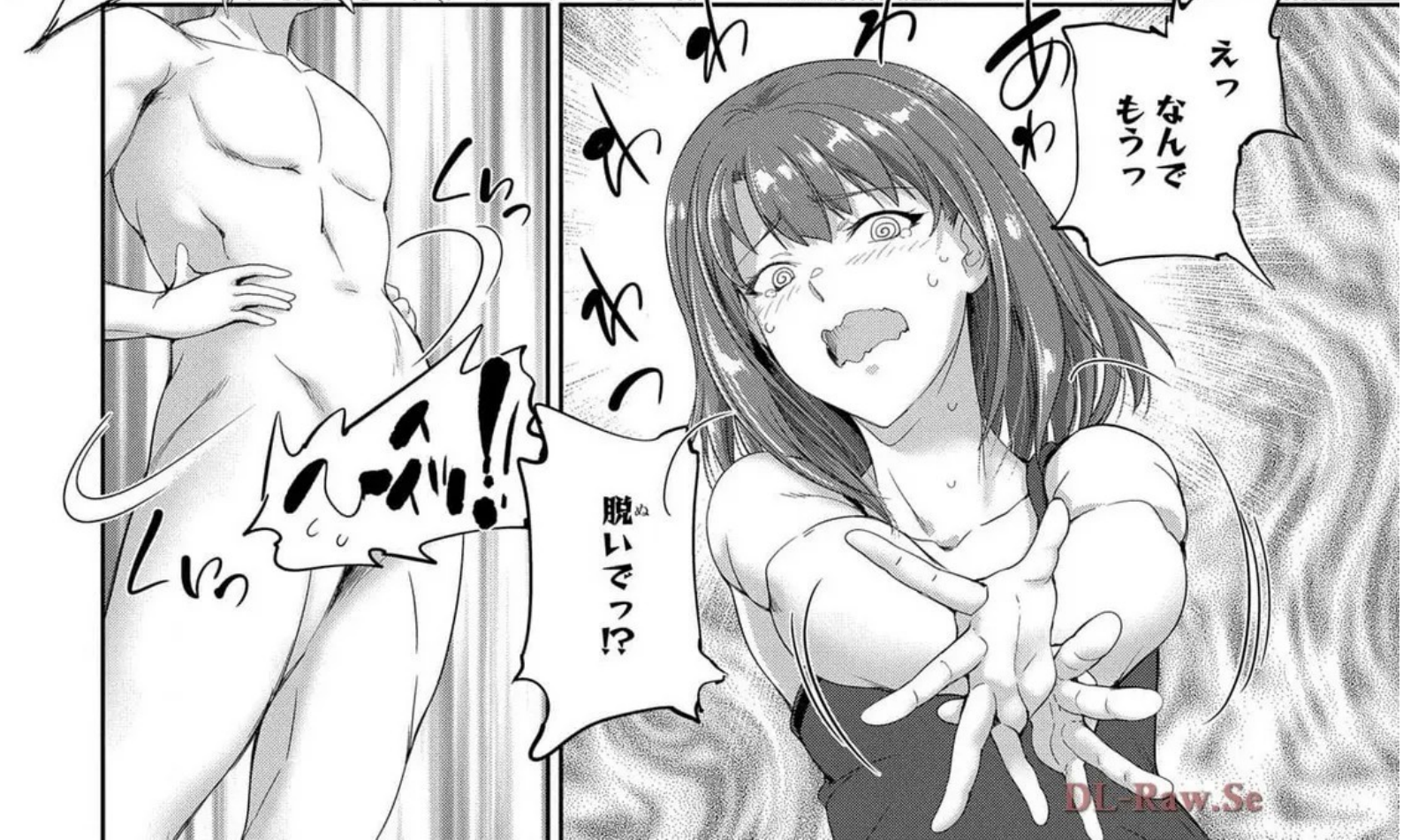


.....
うん
.....

第30話 心揺れる女冒険者をおいしくいただく









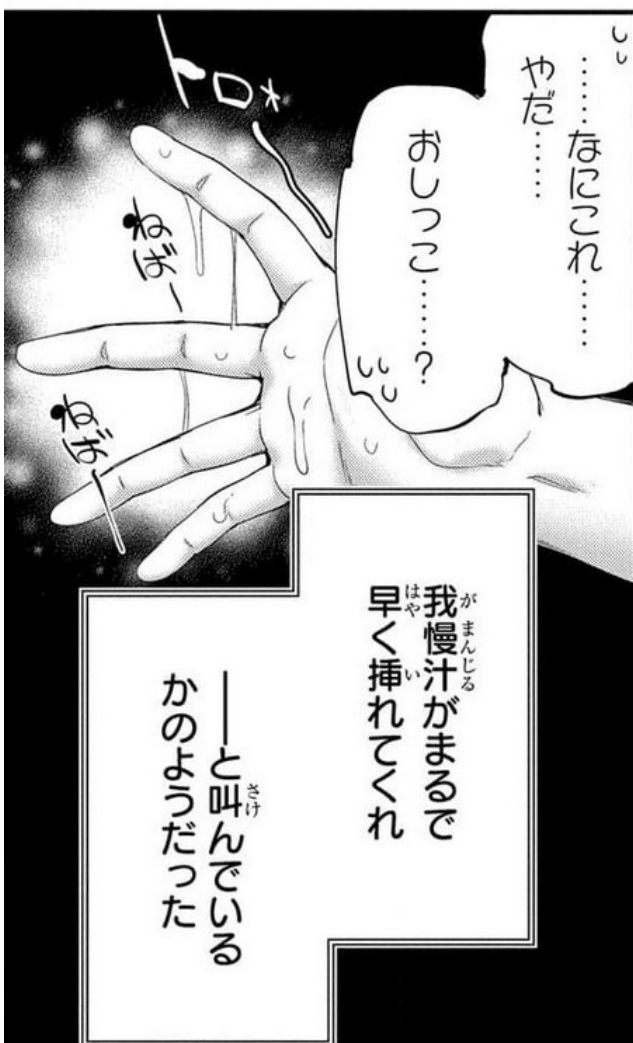
やあ……っ

つれないな
 何なんど度もお前まえの中を
 出で入いりしたモノだ
 いうのに



あっ

さあ
 久ひさ方かたぶりの
 逢あ瀬せを楽たのしもう



……なにこれ……
 やだ……

おしっこ……？

我慢がまん汁じがまるで
 早はやく挿されてくれ

——と叫さけんでいる
 かのようだった



……すごい
 硬かたい

ルベツタに
 会あいたくて
 こんなになっ
 てしまったんだ





会話をしているても
特に俺に對する
嫌悪は漂ってこない

どちらかというと
イブからのほうが
よっぽど嫌われている
気がする

ルベッタは成人なので
ある程度世の中の不条理や
妥協について理解がある

——身体を差し出して
対価を求めることは
やむを得ないという認識が
根底にあるのかもしれない

駄目だ

言うんだ

……やだ

俺は好きだぞ

俺のものに
したいくらいにな

私

メルギンが……

一番好き……
だから



そうか
メルギンが
いちばん
一番か

でも好きな人は
なんにん
何人いても
いいんだぞ?

ん……っ

ルペッタ調教計画の
ひとつとして

ベッドの上では
嘘をついては
いけないと
教え込んでいる

……ただ正直に
言わないと
駄目だ

嫌いなら
嫌いで
構わない

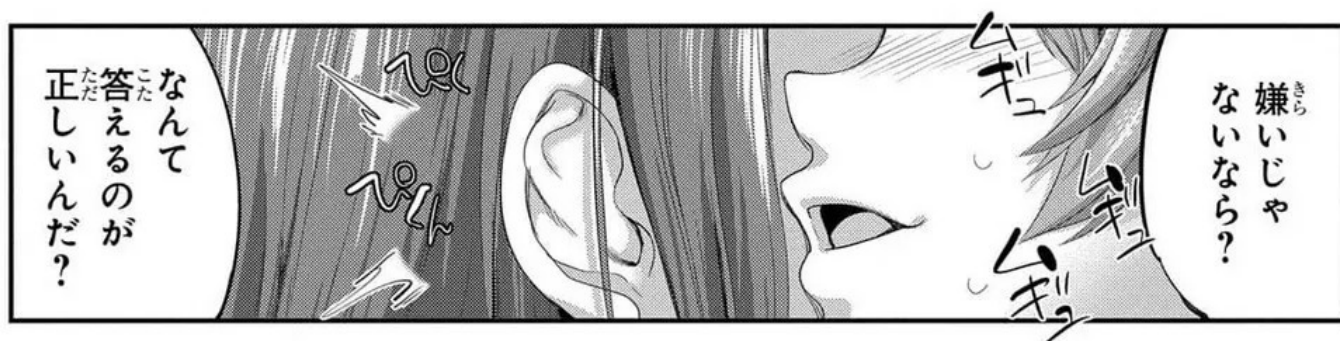


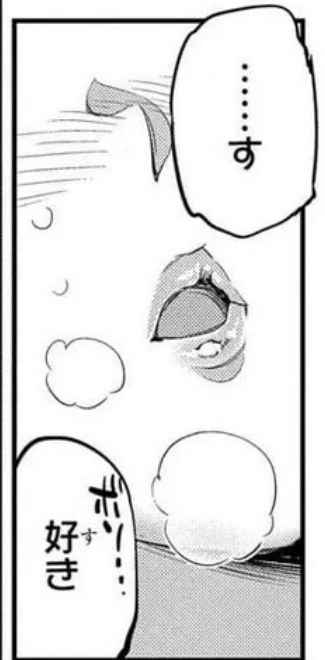
怒ったりは
しない

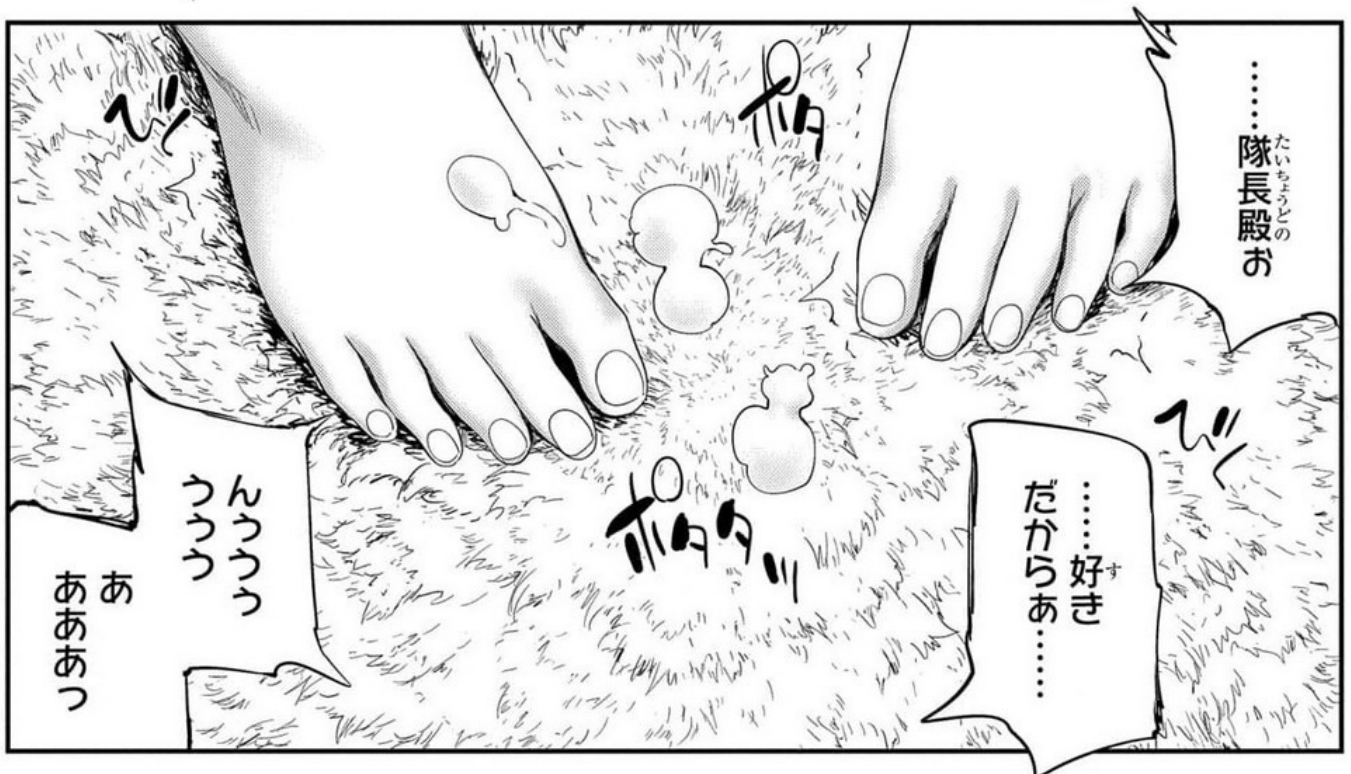
嫌い

っ……

じゃない……







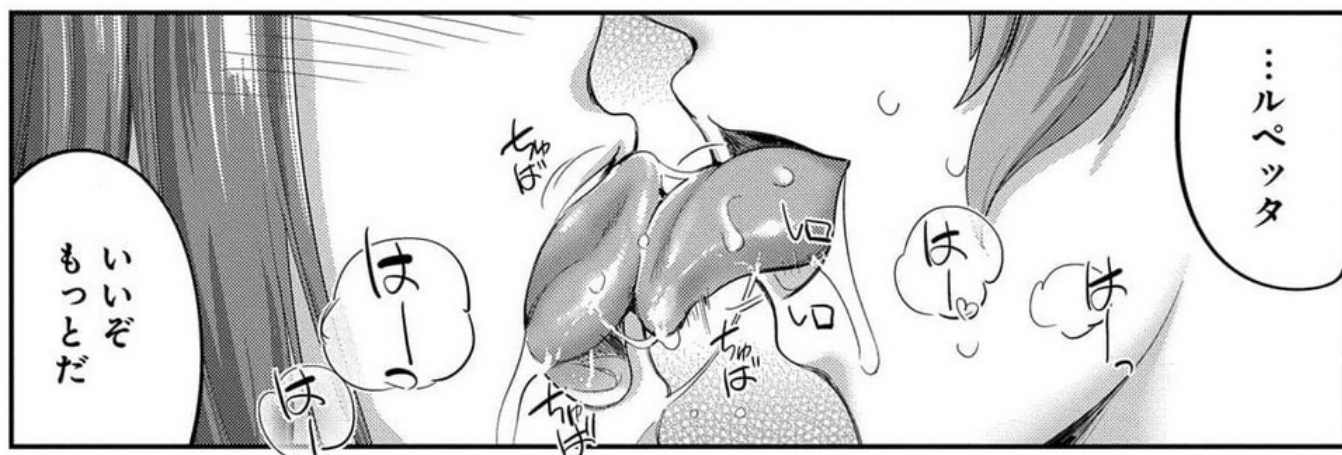








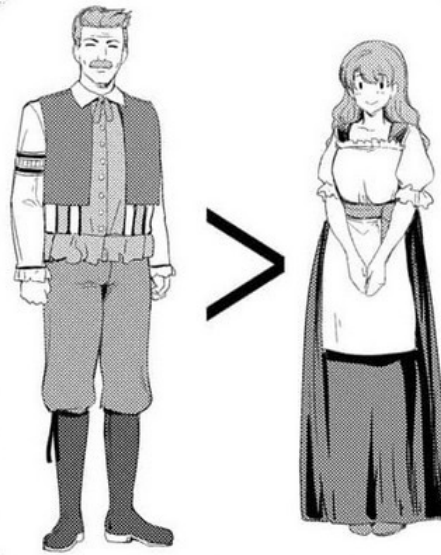






下半身が敏感な
こともあるが

精神的な
興奮要素が
大きいようだ



基本的にエルオ大陸は
男尊女卑であり

男性側が女性器を舐めて
愛撫するなんてことは
あまり考えられない
ことなのだろう

ミニットなどは
クニニでそれはもう
面白いくらいによがる

男性側

しかも貴族である俺によって
舐められるというのは
相当に興奮するらしい



だが
ルペッタは
はつきりとそれを
口に出せない

それは
このあたりの
価値観のせいだ



セックスとは男性を
喜ばせるための行為で
女性側から快楽を
求めるのは淫乱
というものである

気持ち良かったときに
正直に反応する

ただそれだけのことで
割と恥ずかしがられる



隊長殿お
い……

いつもの
して……♡

いつもの？



いじわる
しないで……

んっ……

んううう
やだあ♡



さて
何だったかな？

そこをあえて
言わせるのが
またよいのだ

わかつたよ

あ♡

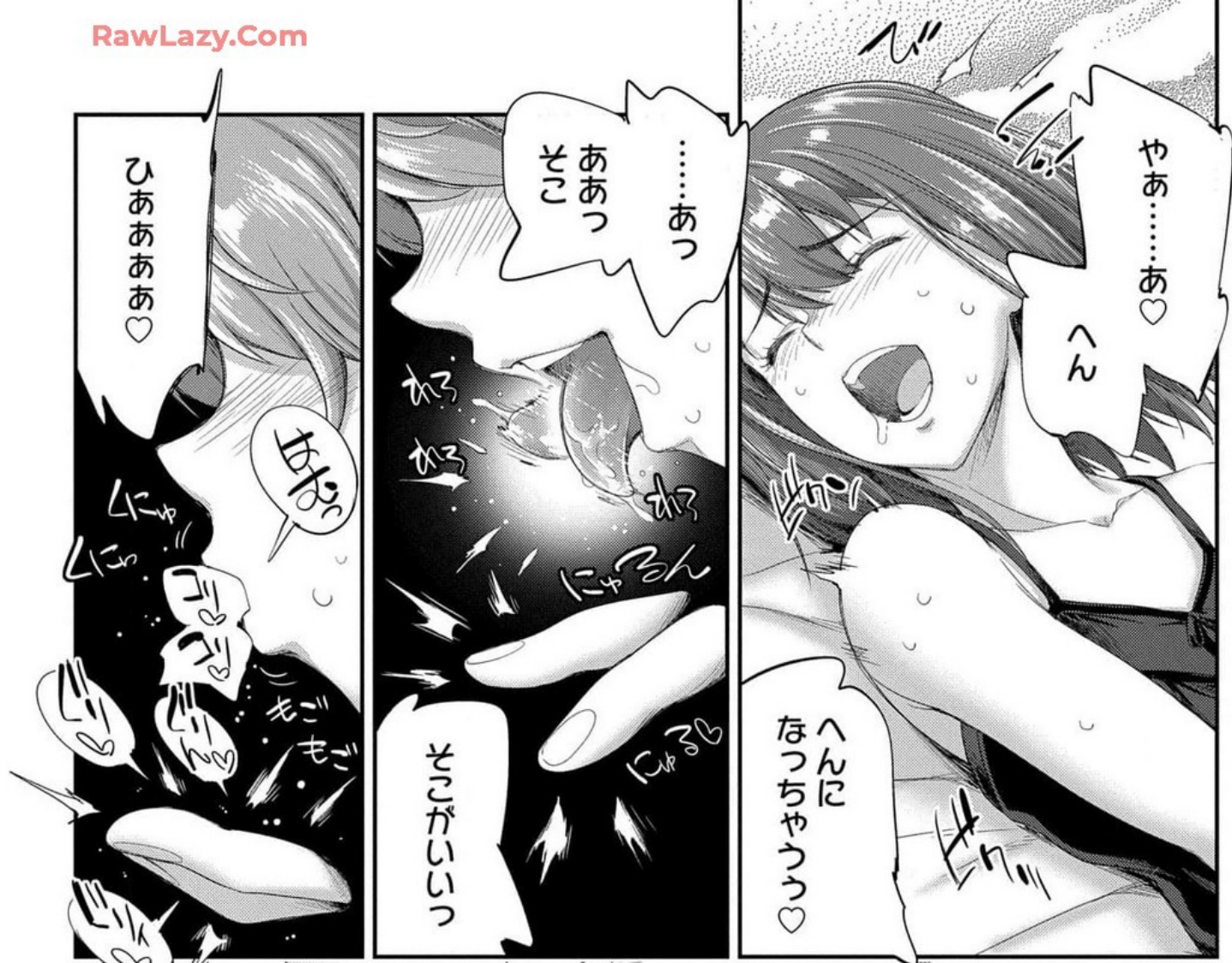
きもちよ
気持ち良くして
あげるから

h h ♥

あ

あや
ああ
ああ

んんんんん♡



RawLazy.Com

あ

あんなにっ♡

だめ! かわいい!-

やだあ へんになっちゃう!-

!!!!!!♡

DL-RAW.SE

RawLazy.Com

やだあ
へんになっちゃうー!

あ
あんんっ♡

だめ!
こわいっ!

DL-Raw.Se

RawLazy.Com

あ
あんんっ♡

やだあ
へんになっちゃうー！

だめ！
こわいっ！

はぁはぁはぁ♡

DL-RAW.SE

[illegible]

RawLazy.Com

あ
あんんっ♡

やだあ
へんになっちゃうー！

だめ！
こわいっ！

はぁはぁはぁ♡

DL-RAW.SE



やだあつ!
やめてえ!!

わうっ!?

やだっ
こんな格好!
かっこう

見ないで!

やだあつ
恥ずかしい!!
はず

俺も気持ち良く
させてくれ
おれ

—挿れるぞ



.....んああああ♡

おっ!!



はー♡



はー

はー



おおおおお.....

いいぞ
ルペツタ



うえ
した
りょうほう
上と下の両方で
けつごう
結合した満足感が
こころ
心を満たしていく

せいじょうい
やはり正常位は
キスしてなんぼ
である



う……ん……
隊長殿……







ルペッタ!

お前は
まへ
俺のものだ!

ルペッタッ!



快楽に酔いながら
俺は彼女の口に吸い付いた

このまま一つになって
眠ってしまいたいと思うほど
心地よいものであった





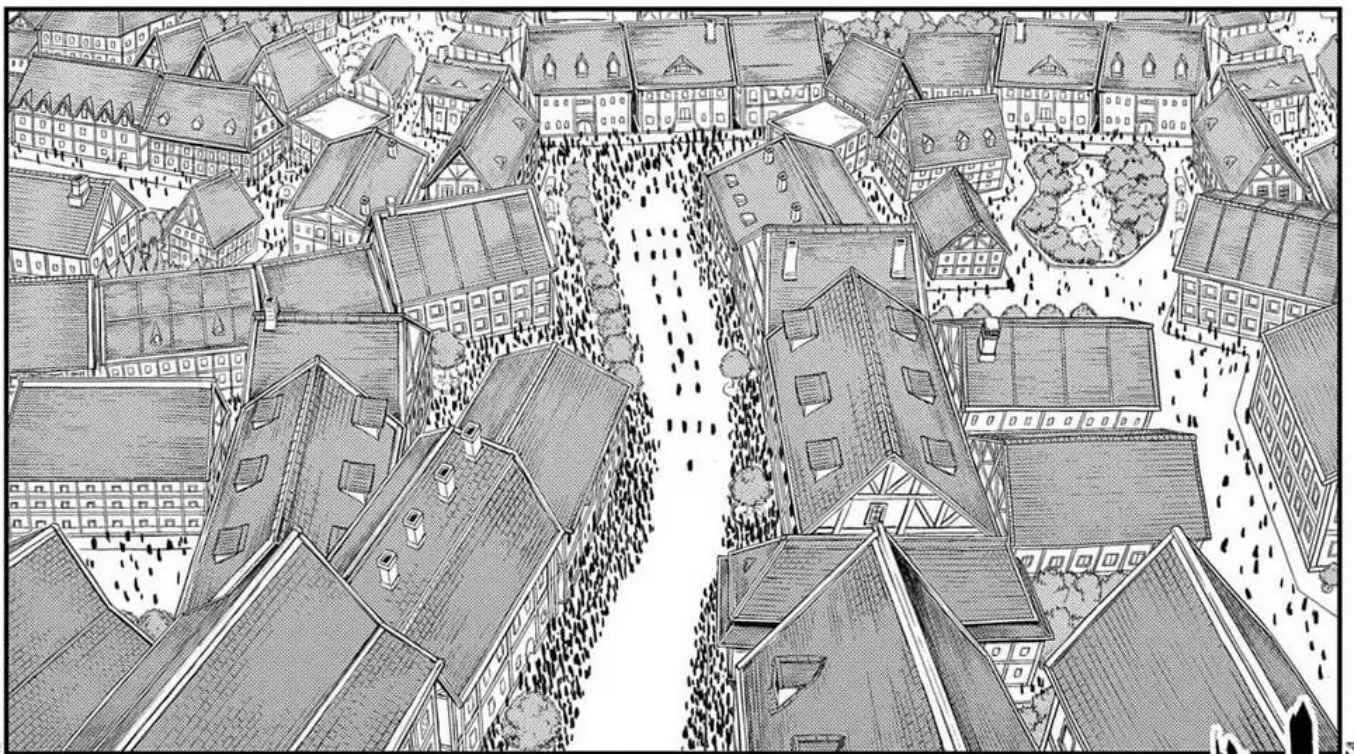


侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～



第31話 市内の様子





わか
若さまー！

きやああ
あああー！

さすが
お貴族さま！！





俺が倒した亀吉の
討伐祝いの祭り
か

すごい
人出だな

おっと
亀吉じゃなかった



若様
カメキツシュ
ですが…

なんの
ことだ？

若様がそのように
呼んでいたの
正式な魔獣名に
するのかと…

ちょ
カメキツじゃ
ねえから

日本語
だし！

なんてことが
あったからな
気をつけないと



それにしても
こんな朝から
こんなに集まって

…仕事は
いいのか？

成熟魔獣との戦いは
1日や2日で終わる
ものではありません

市民達は
数日間の籠城を
覚悟していました

魔獣討伐の報が
市民に伝わったのは
早朝のことです

今日
仕事を
するつもりで
朝起きた者は
いないでしょう

なるほど

確かに
その日のうちに
倒してしまっ
たからな

夢かと
おも
思いました

脅威階級
二位を
一晩で……

わかさま
若様のあの一撃も
信じがたい
威力でした……

本来
成熟魔獣は数時間で
倒せるようなもの
ではない

例えば
俺の祖母カシアが生前に
成熟魔獣ノーステッタと
戦ったのだが

そのときは
討伐に3日ほど
かかったそうだ

そして討伐後
精神を蝕む
奇病に侵されて
亡くなったらしい

詳しくは教えて
もらえなかった

なんにせよ
そういうことがあったので
俺がニューネリー城から
隔離されるのもやむなしである

自分自身に全力の治癒魔法を
何度も施したので
感染はしていないと思うが
念のためだ

ところで
フィールド管理は
領主の仕事なので
成熟魔獣の出現は
批判される余地が
あるようにも思える

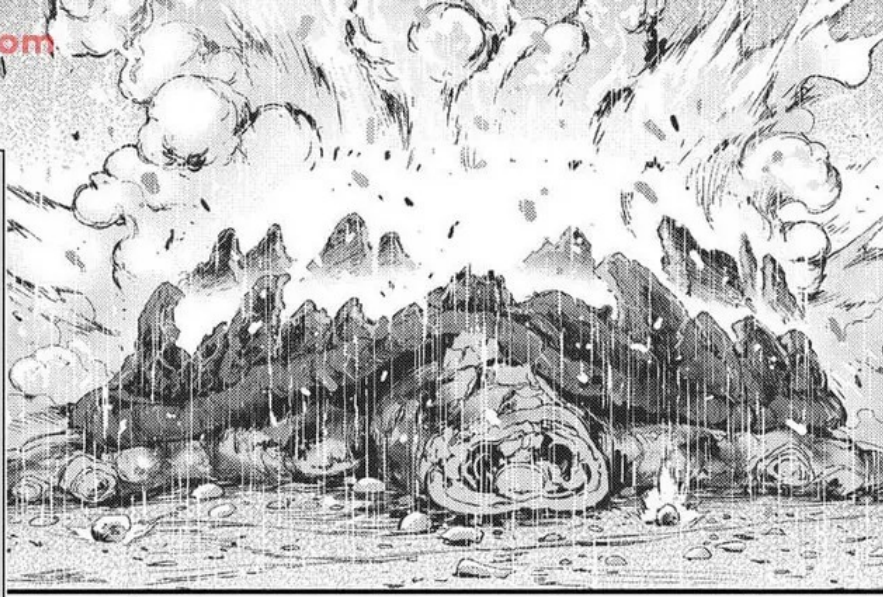
もちろん実際に
領主にそんなことを
言える市民など
いるわけではないが
一応筋は通っている

だが大昔から
成熟魔獣の出現は
天災の一種という
扱いであり

予防できれば
ラッキー程度に
思われているのだ

そして市民にとって
成熟魔獣爆誕より

それを倒した
事実のほうが
優先されるようで



お貴族様が
魔獣を倒したぞ！

いやっほう！

強い！

すごい！

かっこいい！

これで
ニューネリーも
安泰だ！

——と
なるのだ

そういうわけで俺は
市民達から手放して
称賛されるというわけだ





ひろば
広場のほうが
やけに混雑して
いるようだが

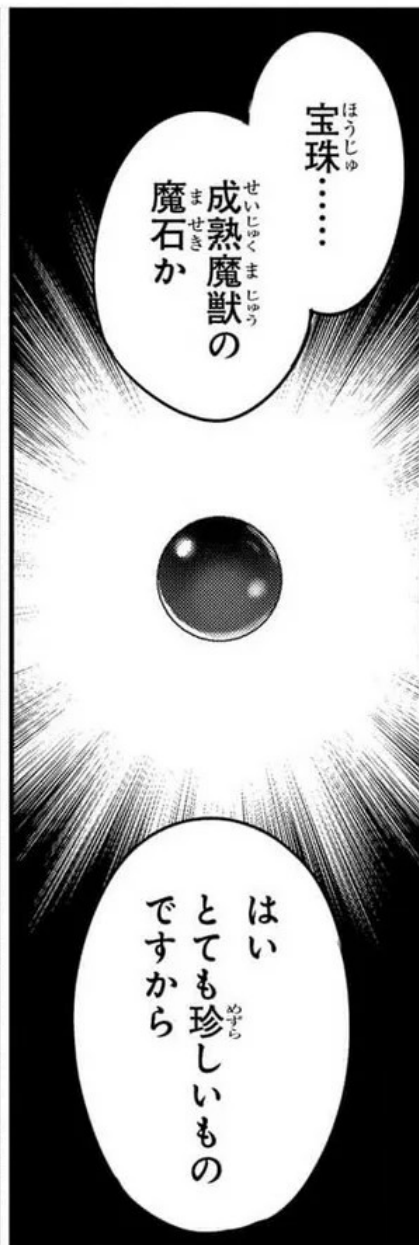
何かあるのか？

さながら
前世紀日本の
花火大会の
ようだな……



それに先々代様が
エバーミル市で討伐した
ノーステッタの宝珠も
一緒に展示されて
いるそうです

市民が興奮するのも
無理はありません



宝珠……

成熟魔獣の
魔石か

はい
とても珍しいもの
ですから

今朝
魔獣の解体が
終わる
宝珠が広場に
持ち込まれました

ひとめみ
一目見ようと
集まってきたの
でしょう



俺が生まれる前に
亡くなったのだが
祖母カシアの人氣は
未だに根強い

家中の混乱を治め
強いクオルデンツエを
取り戻したこと

先々代当主として
多方面で活躍し
影響力を強めたこと

その業績が演劇として
楽しまれていることなど
人氣の理由は多岐にわたる



大旦那様もお喜びに
なられるでしょう

……単騎でお戻りに
なれそうなきがします

俺もそう思う

意外なことに
祖父ガルフィスは
クオルデンツエ家のお嬢さんである



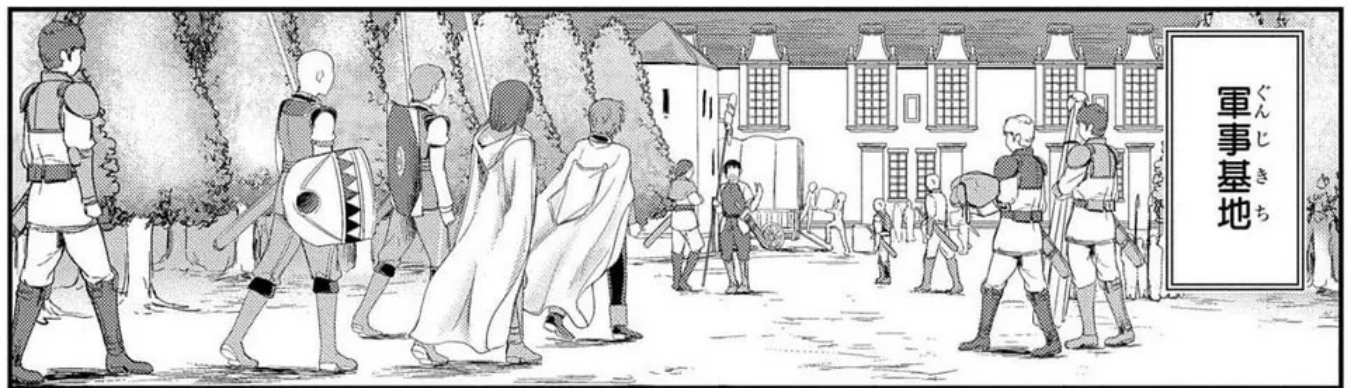
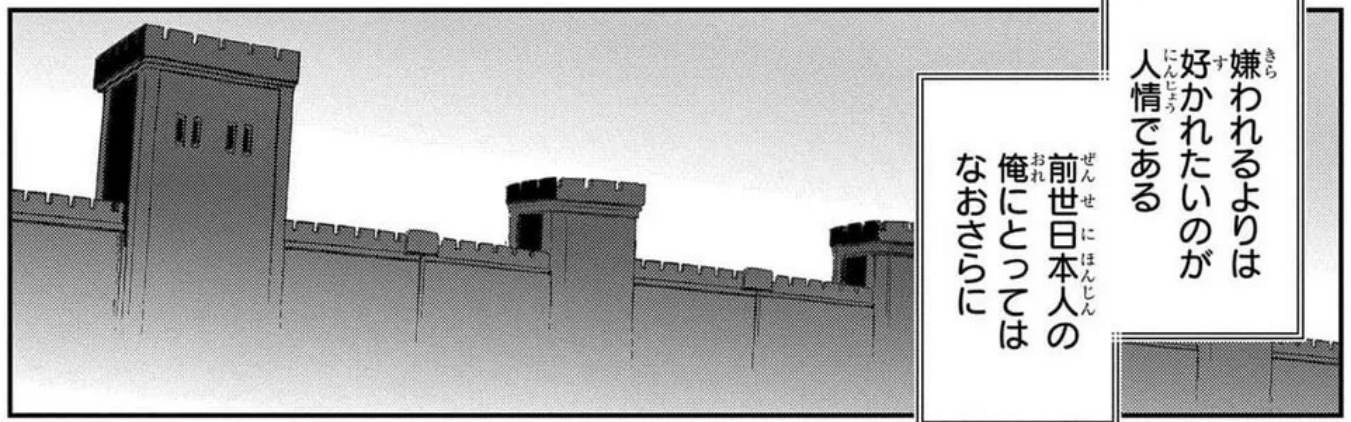
祖母が亡くなった時は
まだ父も若かったため
祖父が暫定的に当主になった

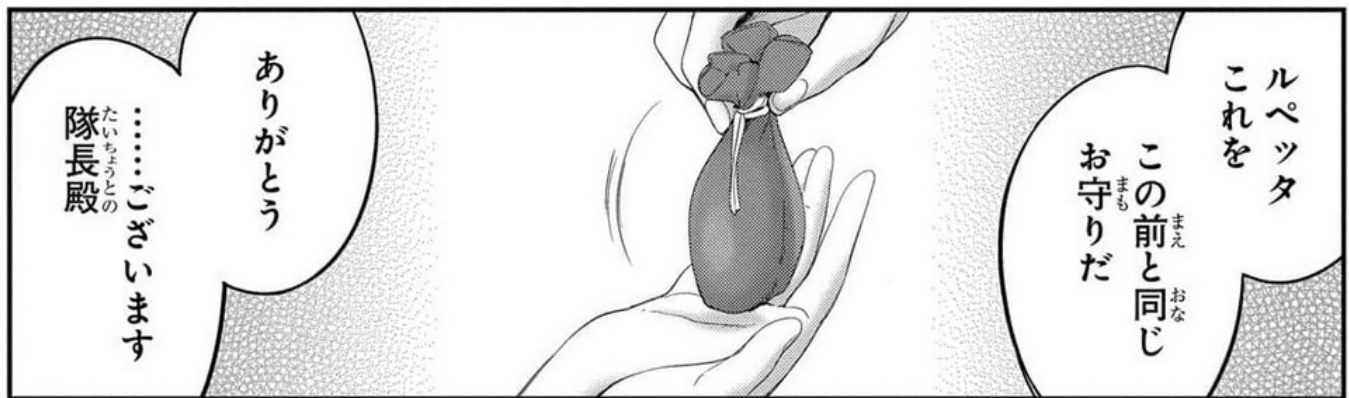
父が貴族として
一人前になると
さっさと家督を譲り

戦争に明け暮れて
いるのだが









そう……

ですか

良かったです

ニューネリー市には
孤児院もあるのだが
環境が良いとは言えない

労働力になれば幼児でも
とにかく扱き使われる
タコ部屋状態であり

手間のかかる赤子などは
予算によってはまともな
世話も期待できないため
死のゆりかごになりかねない

ルペッタの救った8人の
子も過酷な人生が
待っているはずだった

——だが

驚くべきことに
赤子8人は

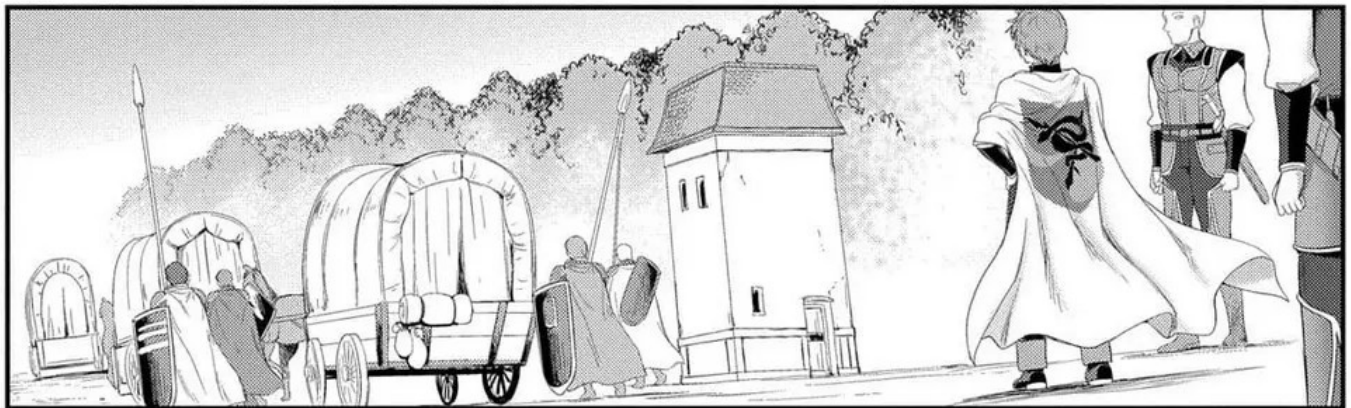
全員が従祖だった

従祖の使い道は
無数にある

特に物心つく前の
従祖の子であれば
騎士家の養子に
引く手数多である

騎士家は従祖が絶えれば
お家断絶もあり得るのだ
従祖の子が増えて
困ることなど何もない

今頃ニューネリー城では
父が上機嫌で赤子の配布先を
考えているに違いない



若様

例の赤子の件で
お話が

なんだ？

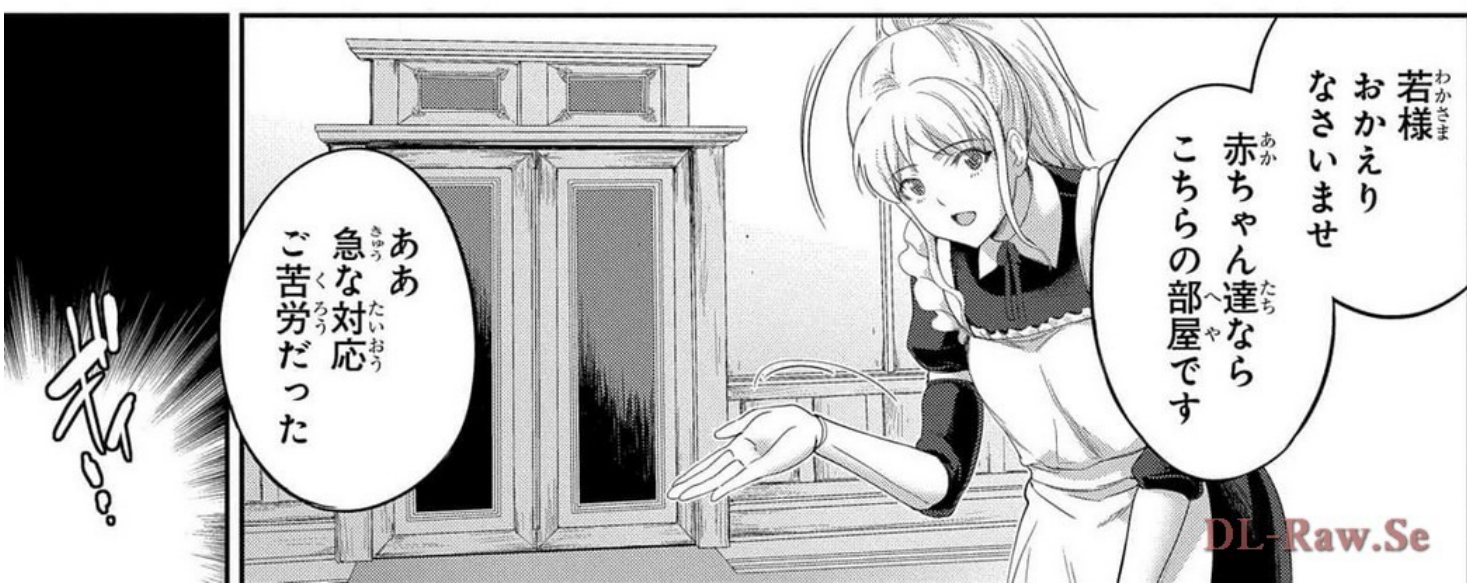
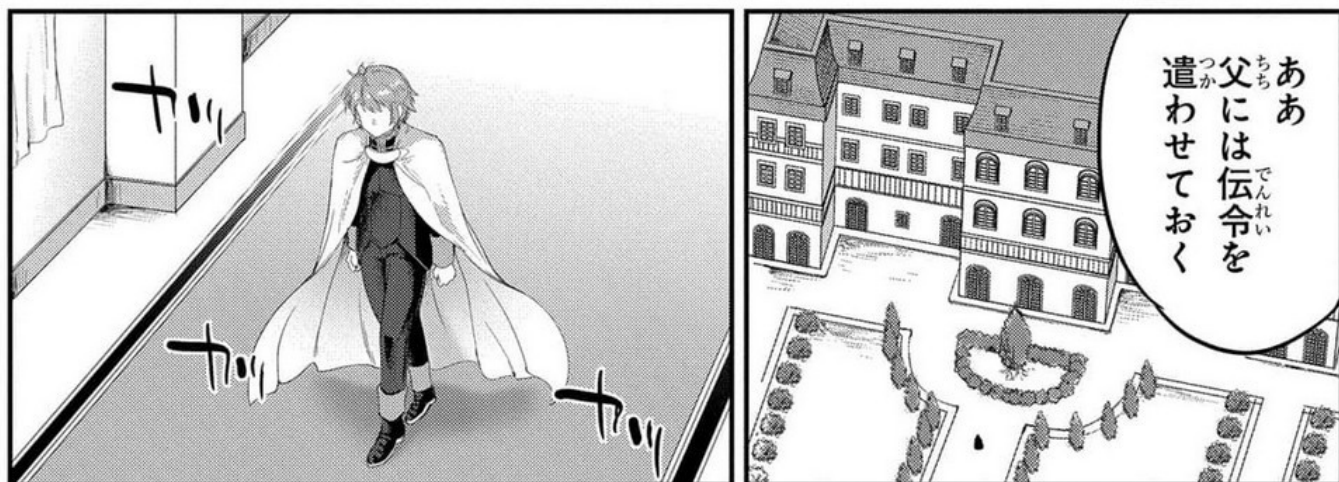


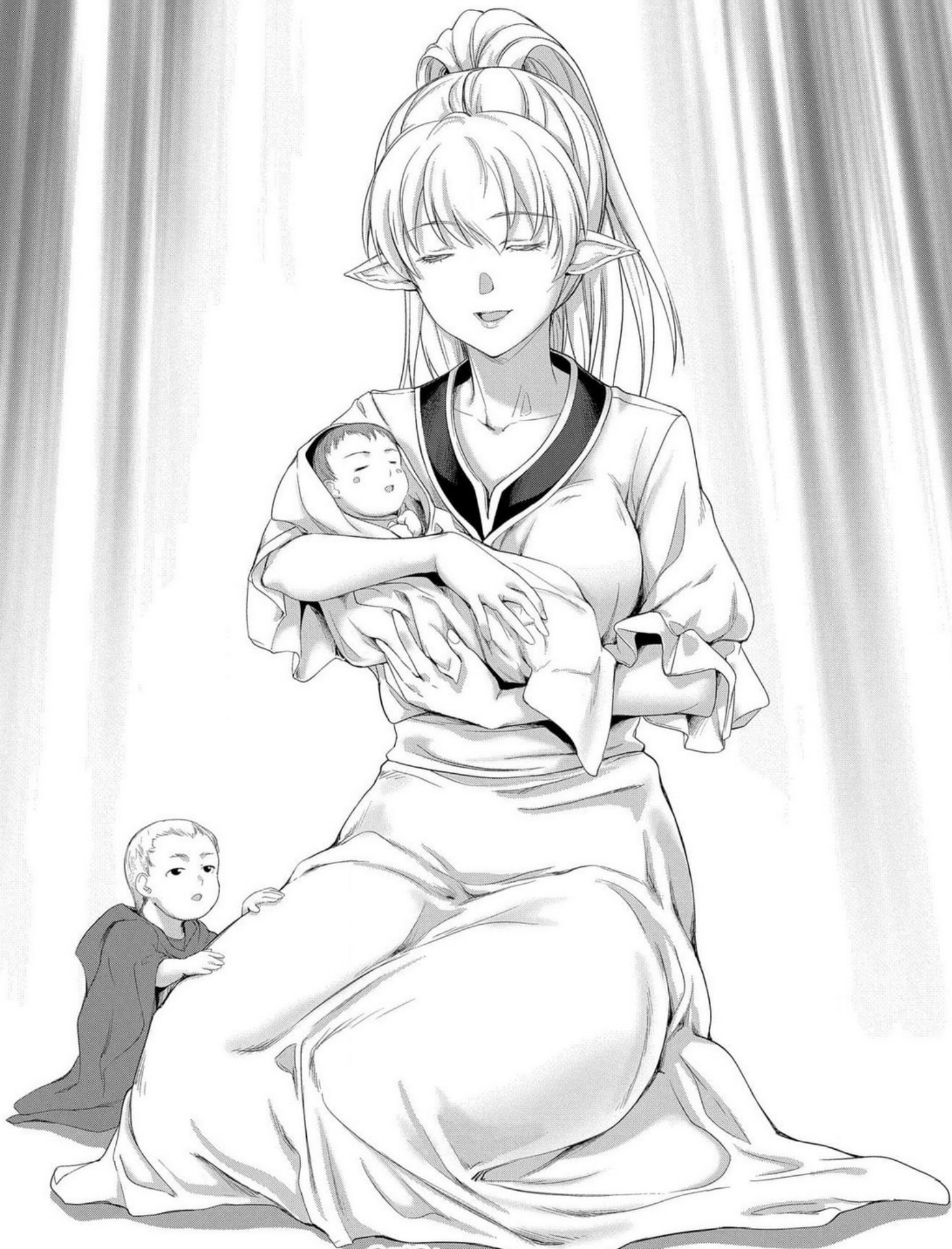
赤子のために
母乳が出る女性を
乳母として募集を
かけたのですが

その……
軍事拠点には
勤めたくない
と断られる場合が
多いのです

城下町の外で
通いづらく
兵も多いので……







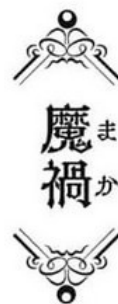


侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～



コミカライズ記念書き下ろし短編小説



エルオ大陸にあつて地球にない災害、それが魔獣災害である。

フィールドの霧の中から誕生した魔獣は長い歳月をかけて成長し、最後には外界へ飛び出していく。主な被害は人里の襲撃や土壤汚染だが、魔獣の特性によつては想定外の災厄が広がることも珍しくはない。これらは人の都合など一切無視して自然発生するため、エルオ大陸では天災の一種と見做^{みな}されていた。

そしてその中でも成長限界に到達した完全体、いわゆる成熟魔獣によつて引き起こされる大規模魔獣災害を特に魔禍と呼ぶ。エルシニアの禍^{わざわい}やメアスレスの禍など、魔禍はその元凶となつた魔獣の名を冠して呼称することが一般的である。

クオルデンツエ家が現在領有し本拠地とするニューネリー市はかつて魔獣カリエステーベによる魔禍、カリエステーベの禍を被災した都市であつた。

「ギルド長、今のうちに家に帰りたいのですが……」

そう問いかけたのは塩ギルドに所属する若手職員である。ギルド長と呼ばれた中年男性は険しい表情を崩すことなく、ぎろりと一睨^{にら}みしてから短く答えた。

「駄目だ」

その声には有無を言わさないだけの力がこもっていた。質問をしてきた者だけでなく、周囲で聞き耳を立てていた者までも萎縮させるほどに。

「子供の躰しっけでもさせるつもりか？ 成熟魔獣が現れたら俺たちはどうすればいい、言ってみろ」

三時間ほど前のこと、都市南方に広がるニューネリーフィールドから成熟魔獣が爆誕した。これはおよそ三〇〇年ぶりの出来事であり、ニューネリー市は現在も恐怖と混乱に包まれている。

そしてこの緊急事態を受けて領主のクオルデンツェ家は即座に魔獣の討伐隊を編成、またこれに合わせて市内に厳戒態勢を敷いている。

「……屋内で待機です」

成熟魔獣が出現した際の大原則は「建物の中で動かない」だ。外を出歩いている人間であれば近場の建造物に避難することが最優先であり、たまたま屋内にいた人間であればそれがたとえ他人の家であってもその場に待機することが求められる。

「わかつているなら黙っている。皆、同じだろうが」

そのため市内の塩ギルド本部で働いていた職員たちはそのまま外に出ることができなくなり、事実上の軟禁状態になってしまったのだ。

「……こんなことならとつと帰っておけばよかったぜ」

二人のやり取りを見ていた別の職員の吐いた小さなばやきは、緊張感で張り詰めていた室内によく響いた。

今回、魔獣出現直後に全てのニューネリー市民が即座に原理原則に則のつとって避難行動をしたかという、そのようなことはない。何せニューネリー市が魔禍の脅威に晒さらされるのは三〇〇年ぶりのこ

となのだ。頭ではわかっていても実際に行動に移すことは難しい。

というより、避難行動をするしない以前の問題であった。事実を正しく認識することがまず難しかったのだ。一部の民衆はパニックになったりもしたが、大多数の市民はそうではなかった。成熟魔獣が出現したという事実を突きつけられても現実感がなく、なんとなく大丈夫だろうと考えてそのまま日常生活を続ける者が少なくなかったのである。「ニューネリー市が魔禍に見舞われるなんて、そんなことあるわけないだろう。現にこれまで一〇〇年二〇〇年とずっと平和だったんだ。自分が生きているうちに成熟魔獣が誕生するなんて、そんな運の悪い話があるもんか。きっと誤報さ」と。

そうこうしているうちにクオルデンツェ家が市民に対して屋内待機命令を発し、大通りを封鎖して混乱鎮圧のための兵を配置した。結果として塩ギルド職員をはじめ、多くの市民がその時いた場所に釘付けにされてしまったのだ。

「ふん、いいことじゃねえか。太守様は頼りになる」

発生頻度の極めて低いトラブルに対する備えは疎かになりやすい、そのことをギルド長は経験則で知っている。塩ギルドはフィールドを相手にした商売であるため多種多様なアクシデントに遭遇するが、どうしてもよく起きる事故や失敗にばかり目が向いてしまい、レアケースへの対応は遅れてしまいがちだ。

彼は強制カンヅメの現状を歓迎してはいなかったが、ニューネリー市では三〇〇年間一度も発生していなかった魔禍にほとんど動じることなく、市内を早期に制したクオルデンツェ家の手腕と心構えには素直に感心していた。

話は終わりとばかりに手を軽く振って不満げな若手職員を追い払うと、ギルド長は近くに座っている部下に尋ねる。

「エバーミル市で魔禍が起きたのは二〇年くらい前だったか？」

「それくらいですね。あの頃は五領様が健在でした」

五領様とはクオルデンツェ家の先々代当主クオルデンツェ・カシアのことである。エバーミル市に成熟魔獣が出た際には討伐隊を率いて出陣、これを撃破している。

「……そうだったな。五領様は今の太守様の母親だ、今回ニューネリー市で迅速に動けたのもあの時のことがあったからかもしれん」

その頃のクオルデンツェ・ルークセは次期当主の地位にいたばかりの青年だ。若い時分に被害の大きな魔禍を体験したことは、その後の人生観にも多かれ少なかれ何か影響があったに違いないとギルド長は考える。

「それに二年前の魔獣エルシニアもあります」

「ああ、それもだ」

ついでのことのように語る二人であったが、それは仕方のない部分があった。およそ二年前に発生したエルシニアの禍は大陸全土に大きな衝撃を与えたが、本当の意味でその脅威を実感したのは主に支配者層なのだ。そもそも魔獣エルシニア自体がクオルデンツェ領に侵入していないため、特に隸祖のニューネリー市民にとってはそこまでインパクトのある魔禍とは言えなかった。

「なんにしても討伐隊がすぐに動いてくれたのはありがたいことです。おかげで外出禁止になってしまいました。これはやむを得ないかと」

ギルド長たちは知る由もない話であるが、今回クオルデンツェ家が迅速に動くことができたのはエルシニアの禍が大きく関係している。

魔獣エルシニアは魔力を持つ者を死に至らしめる凶悪な奇病をばら撒いた。これによって大陸各地で主祖と従祖が大量死することになったのだが、幸いなことにクオルデンツェ家の被害は少なかった。クオルデンツェ・ウィルクの莫大な魔力量にものを言わせた超ゴリ押し治癒魔法で快癒することができたからだ。

そういった事情もあつて魔獣エルシニアの奇病が猛威を振るっていた時期、ニューネリー市には治療が必要なクオルデンツェ関係者が集められている。当然だが治療が必要な人間とは主祖か従祖であり、主祖か従祖とは要するにクオルデンツェ領内で強い権限や発言力を有する人間である。魔禍をきっかけに一堂に会した彼ら彼女らが、領内の魔禍対策について語り合うのは自然の流れだろう。こうして突然開催された言わばニューネリー魔獣災害対策フォーラムによつて、クオルデンツェ家中では成熟魔獣が出現した際の動き方について改善や再確認が行われ、意識の向上が図られたのである。エルシニアの禍からまだそう時が過ぎていないうちに成熟魔獣が出現したことは、考えようによつてはタイミングが良いとも言えた。

「まあ、命令があろうとなかろうと外出は極力避けた方がいいだろう。穢れの危険があるからな」魔獣は様々な手段で大地に穢れをばら撒く。土壤に直接触れて汚染することもある。この拡散される汚染物質は人間の体には花粉のように風にのせて広範囲を汚染することもある。この拡散される汚染物質は人間の体には毒であり「穢れ」とも呼ばれ、非常に恐れられていた。

そして成熟魔獣はこの汚染物質を人類大量虐殺の手段として用いることがあった。超巨体を誇る

成熟魔獣からすると、ちょこまか動く小さな人間を一人一人殺していくのは手間が掛かってしまう。広範囲に穢れを撒き散らして一網打尽にした方がコストパフォーマンスに優れているのである。

そのため、基本的に平民隷祖は屋内で息を潜めていた方が安全とされている。スタンダードな成熟魔獣が広く放つ穢れならば、雨や雪を防げる程度の施設で身を守れるケースが大半なのだ。

領主が都市住民に屋内待機命令を下す目的の一つが穢れの毒に対する備えであった。なお、これはあくまでも目的の一つであって一番の目的というわけではない。

「第一、大守様の命令に反する馬鹿をうちから出すわけにはいかない。お前ら、討伐の妨害をしていると見做されるような行動は厳に慎めよ」

一番の目的、それは魔獣討伐をする上で邪魔になる人間を閉じ込めておくことにある。

パニックになった人間が同じ場所に大量に集まると、相乗効果でパニックをエスカレートさせていく可能性がある。外出を自由にすると果たして民衆がどのように動くのか、その予想は非常に難しいものになるのだ。もしも混乱する群衆が市内に溢れ^{あふ}街道に殺到すればその鎮圧にリソースを割かなければならず、最悪は軍の行動にも支障が出かねない。領主側が成熟魔獣の早期討伐という目標を掲げる際、都市住民という要素は不安定で不確実な存在として映ってしまうのだ。「俺たちが脅威を排除するからお前らは黙って引っ込んでいろ」という本音が屋内待機命令と言っているだろう。実際のところ、成熟魔獣を相手に隷祖の市民にできることはほとんどない。そのため「邪魔をしない」ことが一番の協力になる。逆に言えば、余計な行動を取ると討伐の妨害をしたと受け取られ、厳罰に処されてしまうのだ。エルオ大陸では絶対に許されない最悪の公務執行妨害である。

「魔獣が都市から十分に離れたら自宅に戻る時間くらいは与えられるはずだ。それまでは動くな、

いいな？」

脅威の度合いにもよるが、成熟魔獣の討伐は数日から数週間という長期戦になる。さすがにその間ずっと屋内待機を継続できるはずもないため、魔獣の戦闘スタイルや能力、性格などの闘型をある程度把握できた段階で制限は緩和されるのだ。

突然の軟禁に不満のある職員も多かったが、ギルド長にそれ以上口答えする者はいなかった。なんだかんだ言っても平民隸祖である彼らは魔獣討伐が無事に終わってくれることを切に願っているのだ。その妨害になるようなことをしたいとは思っていない。

「ギルド長、出張所の方は大丈夫ですかね？ 魔獣が出た時間にはもう今日の作業は終わっていたはずですけど」

別の職員が口にしたその問いに、ギルド長は表情を歪めた。

ニューネリーフィールドに入って資源を採掘する作業員たちのキャンプ地である出張所は、業務効率を考えてフィールドのすぐ近くに設置されている。成熟魔獣が出てきた場所と進路によっては作業員に被害が出ていてもおかしくはなかった。

塩ギルド本部には未だ出張所の安否の報は届いていない。屋内待機命令が出ているため伝言要員を使い走り出すこともできないのだ。

「……わからん。危険な魔獣が出た時は中に逃げるのが鉄則だ。こう言っちゃなんだが、成熟魔獣も危険という意味では同じだ。いつも通りに動けばいいんだが……」

魔獣は一度フィールドから飛び出すともう二度と生まれ故郷に戻ることはない。これは成熟魔獣と未熟魔獣で共通している習性である。そのため、隸祖が太刀打ちできないほど強い魔獣が出現し

た際はフィールドに駆け込むことで難を逃れることもできるのだ。

ニューネリーフィールドは未熟な魔獣をそれなりの頻度で排出しており、年に何度かは従祖でなければ討伐ができないほど強い個体も出る。塩ギルドの作業員であればフィールドに逃げ込む緊急回避は慣れたものであった。

「……最初の急場さえしのげればあとはなんとかなるだろう。今ならあっちの方が安全なくらいだからな」

成熟魔獣の攻撃は未熟魔獣のそれに比べると規模が遥かに大きく多様で、そして強烈だ。魔力を持たない隸祖がそれら全てに瞬時に対応することは難しいため、危険を感じたらすぐにフィールドに逃げ込める出張所の方が安全だとギルド長は考えていた。常日頃であればフィールド内は事故多発の魔境でしかないが、今に限ってはフィールド外の方が死に近いのだ。

ただし、これはフィールドワーカーとして長年塩ギルドで働いてきた人間だからこそその発想だ。普通の人間はそこまで冷静に理屈だけで物事を考えることはできない。もともとフィールドは恐ろしい場所として認知されている上、成熟魔獣の存在を実際に目の当たりにすると「あんなバケモノを生み出した場所には絶対に近寄りたくない」と本能で感じてしまうのである。

「言われてみれば確かにそうですね。『穢れた羽』の昔話みたいになったら大変ですし」

大きな被害をもたらした魔禍は生き残った人々の心にも深い傷跡を残す。恐怖の体験は住民の間で語り継がれ、親から子へと受け継がれ、やがてその地に根ざした記憶になっていく。それはある意味では都市や地域、共同体に刻み込まれたトラウマのようなものかもしれない。

長い年月を経て風化しつつあるが、ニューネリー市には今も魔獣カリエステーベの爪痕が残って

いた。市民の間で今も伝わる「穢れた羽」の伝承もその一つだ。

「ああ、大昔みたいなきやいなきやいいんだが……」

成熟魔獣の強さを示す基準である脅威階級は五段階で表される。公的な記録として残る魔獣カリエステーベの脅威階級は第二位であり、第一位が半ば伝説の階級として扱われていることを考慮すれば事実上の最上位と言えた。

魔獣カリエステーベはその階級に見合った非常に高い戦闘能力に加え、大地を穢す猛毒の羽毛を広範囲にばら撒く厄介な特性を有していた。羽ばたき一つで隸祖一〇〇人が死ぬと言われたこの毒羽の恐怖をニューネリー市民は歴史の一ページとして、あるいはおとぎ話の一つとして幼少期から何度も聞かされて育っている。

「うちでも一〇〇人近く亡くなったんでしたっけ？」

会話に割り込んできた女性職員のその言葉にギルド長は呆れ顔を浮かべた。

「おいおい、そりゃあ随分と増えたもんだな。どこで聞いた話だ？」

ニューネリー市の塩ギルドは都市最古のギルドと称されるだけあって、カリエステーベの禍が発生した当時も存在している。ギルド関係者が何人も死亡したという話は、年月を重ねるごとに尾ひれがついて現在にまで伝わっていた。

「うちから出た犠牲者は二七人だ。さすがに一〇〇人も死んでいない」

さも「知っていて当然だろ」といった雰囲気語るギルド長であったが、彼がその知識を得たのはついさっきのことである。

成熟魔獣の出現という未曾有の危機に直面し、組織としてどのように立ち回るべきか判断がつか

なかった彼らは過去の記録に答えを求めた。カリエステーベの禍は塩ギルドの長い歴史の中でもトップクラスに重大な事件である。あくまでも民間団体のため貴族家や騎士家ほどきっちりと保存されているわけではないが、それなりに役に立つ情報は残されていた。

「……二七人のうち半数以上は討伐隊に志願した若手だそうだ。昔話にある通り、都市の命運を懸けた死闘だったことに間違いはない」

ギルド長がまず確認したのは当時の職員が作成した総まとめ資料である。これは魔禍終結後に編纂されたものであり、塩ギルドで発生した出来事とその顛末について記したものであった。

ところで、現代日本で考えると三〇〇年前の文書を現代人が読むのはまず不可能に思えるが、エルオ大陸では特に不自然なことではない。その時代はゼス教聖高会が力を持っていた時代であり、聖都から地方に出向した司祭たちが教典の教えと同時に「正しいエルオ語」を広めていたからだ。

ゼス教聖高会は領主貴族に対する言語教育はもちろん、一般の教徒の言葉遣いも厳しく指導し、訛りや方言を許さなかった。時代が下るにつれてそれまで存在していなかった新語が制定されるなど多少の変化こそあったが、司祭の時代を通してエルオ語そのものが大きく変化することはなかったのだ。

そういった歴史的背景があるため、ただのエルオ語の読み書きしかできないギルド長でも問題なく三〇〇年前の文書を読むことができた。

ちなみに、乱世以降は司祭による言語指導が減少あるいは断絶したことで訛りや方言、新たな文章表現や慣用語、造語が雨後の筍のよう^{たけのこ}に現れている。おかげで現在のエルオ大陸では遠方から届いた現代の書物よりも、数百年前の司祭全盛期に記された書物の方がむしろ読みやすく感じるという

う、なんとも奇妙な現象を体験することがままあった。

「できることなら当事者の心境を知りたいものだが……」

そう言うとき、ギルド長は机に置かれた資料の山に再び手を伸ばした。

倉庫で最も大事に保管されていた総まとめ資料は要点が簡潔にまとめられており、ギルド長やその部下にとって有用なノウハウ集であった。だが、その記述はあまりにも淡々としているものだった。必要な情報を必要最低限の文章で表現しており、筆者の心情などは一切込められていなかったのだ。部下の一人はそれを読んで「まるで他所よその出来事を記録した文書のようにだ」と評したほどである。

一方で、ギルド長は違う感想を抱いた。心の中で無関係な第三者を装わなければ記録を残すことすらできないほどの恐怖を味わったのではないか、自身の体験として魔禍を振り返ることを無意識のうちに拒絶した結果がこの他人事のような記述なのではないか、と。感情的でない文章であったことがむしろ畏怖の大きさを示しているように感じたのである。

知識だけでなく心情も知りたい、ギルド長とその部下たちの結論は同じだった。そこで彼らは当時の資料らしきものを手当たり次第に倉庫から引っ張り出してきた。どうせ外に出ることができないのだからじっくりと読み込んでやろうという腹である。

「こっちの資料はハズレです。ギルド長の方は何かありましたか？」

「……業務日誌があった。昔のギルド長が残したもののようだ」

ただの業務日誌を三〇〇年も保管できるほど塩ギルドの倉庫は広くない。その部下は詳しい説明を求めて視線をギルド長に向けた。

「どうも日誌を書いている最中に魔獣が出現したらしい。ちょこちょこと覚え書きがある」

成熟魔獣が現れて仕事どころではなくなったため、業務日誌をメモ代わりに使ったのだろうとギルド長は自身の考えを口にする。

『大禍顕現、屋内待機の指示あり、帰宅できずギルド本部にて夜を迎える、市内で混乱多発、皆の無事を太陽の大精霊ウォーテントサーマに祈る』

彼がまず目を惹かれたのはその殴り書かれたような可読性の低い汚い字であった。他人に見せるつもりはなかったのか、単語だけが書き込まれていて何を記録しておきたかったのか判断できない部分もある。また、空きスペースに無理やりに滑り込ませたような記述も多く、そのせいで時系列があちらこちらに飛んでいるため全体の把握が難しいものになっている。

だが、それがかつてない困難に立ち向かう筆者の心をまざまざと写しているようで、ギルド長は強い共感を覚えた。

『職員三人が穢れを浴びる、毒の羽か、職員へ外出禁止の徹底を周知、禍界作業員の安否は現在も不明』

『穢れの症状について、全身に青黒い斑紋、高熱、自力で歩くことかなわず、呼吸荒く譫言を繰り返す、手指腐り落ちる』

『治癒師招聘は困難、為すすべなし』

『職員三人未明に相次いで死亡、都市郊外に再び穢れあり、職員皆外出を畏れる』

次に目についたのは、やはり穢れに関する部分だ。

平民の医療技術では何も打つ手がなかったのだろう、当時のギルド長が毒に苦しむ職員のためな

んとか治癒魔法の使い手を招くことができないか検討を重ねている様子が記述からも窺^{うかが}える。そしてその中に人名と地区の箇条書きを見た瞬間、ギルド長は心臓が握られたのかと思うほどにどきりとした。彼もつい先ほど、いざという時に備えて民間で活動する治癒師の一覧を作っていたからだ。『穢れの勢い衰えず、市外への避難は困難、昼に市から配給あり、禍界作業員と合流、七名死亡』昔のこととはいえ、塩ギルドの作業員が死亡している事実は重かった。今回はどの程度の被害が出るのか考えるだけで彼は暗澹^{あんたん}とした気分になってしまう。

『リグレイ家とアースガン家の援軍到着、午後にオグオルト様の来訪、塩の不足を懸念している模様、ギルドの備蓄を討伐隊へ回すよう手配、長期戦を視野か、市内で兵を募る方針とのこと、要ギルド内事前調整』

ふむ、とギルド長は小さく息を吐いた。

「どうかしましたか？」

「いやなに、上との関係は今も昔も大事だと思っただけだ」

既得権益団体である塩ギルドは領主と密接に関わっている。当時のギルド関係者が騎士や市の上層部の役人と裏で様々な情報交換をしていることが覚え書きからも見て取れた。

『市内の死臭強し、近隣より更に複数の援軍の報あり、教会から要請か、太陽の大精霊ウォーテントサーマのご加護を切に願う』

『アースガン軍壊滅撤退』

『オーエシア軍壊滅の噂^{うわさ}』『エレフオッド軍壊滅、ゲアブラ軍撤退か』

『援軍撤退続出、ニューネリー討伐隊も相当に疲弊、シブフォード市からの援軍未だなし』

『精霊よ我らを救いたもう』

戦況の悪化を示す記述が続いたことでギルド長は思わず深いため息をついた。それは感情移入したことだけが理由ではない。一つの不安が彼の脳裏をかすめたのである。

「……近場に領地を持つお貴族様が多かったんだな、昔は」

「ギルド長、今回は……その、大丈夫なんでしょうか？」

日誌には援軍にやってきた貴族家の名が両手の指で数えられないくらい書かれていた。「貴族は強い」という意識のある平民隸祖からすると、その軍旗の数が多いことは単純に安心材料になる。逆に言えば旗の数が少ないことは不安以外の何物でもなかった。

果たして今回はクオルデンツェ家単独で討伐ができるのか、他家の援軍は期待できるのか、そんな憂いがじわじわと彼らの心を侵食していったのである。

「……大守様はレヴィオス王国有数の大貴族だ。大昔のお貴族様よりずっと力はある」

そうであってほしいという願望が透けた発言であったが、言っていることはあながち間違っていない。

カリエステーベの禍が発生した時代は、ゼス教聖高会が貴族の上位者として君臨していた時代である。貴族勢力が大きな力をつけることを司祭たちは許さなかったため、ニューネリー市の位置するリデア平野を単独支配する貴族家などは存在しなかった。小さな貴族家がポツポツと点在している時代だったのだ。乱世を経て広大な領地を獲得したクオルデンツェ家とは比べものにならない。

「そうです……よね？」

「そうだ」

もつとも、それは貴族家としての総合力の話である。彼らは一番重要な主祖の頭数という観点からはあえて目を背けていた。

「王国からの援軍でもあればいいんだが……」

レヴィオス王国貴族クオルデンツェ侯爵家の危機を救うべく王家であるレヴィオス家が動いてくれる……そんな甘い期待をするほどギルド長は呑気な性格をしていなかった。援軍があるとしても距離が近く、実力ある貴族家のシルオペア家やエヴェナピス家くらいだろうと。

「……いや、援軍も当てになるかはわからねえな」

他所の貴族が他領の魔獣災害にどこまで本気になってくれるかは疑わしいものがあつた。業務日誌にもあるように、援軍にやってきた他領の討伐隊も途中で見切りをつけて撤退しているくらいである。結局のところ、ニューネリー市の守護者であるクオルデンツェ家が踏ん張らなければ話にならないとギルド長は結論づける。いずれにしても彼らにできることはない。

「俺たちにできるのは祈ることだけ……か」

今も昔も俺たちは何も変わらないな、ギルド長はそう自嘲した。



COMMENT

漫画版「侯爵嫡男好色物語」をご購入いただきありがとうございます。
原作のALです。

今回は成熟魔獣との戦いがメインになりました。
エルオ大陸で貴族や高位司祭が偉そうにしていられる理由の大半は純粋な戦闘能力によるものですが、この人類の敵と戦うヒーロー要素もあるから平民隷祖はその支配に納得している部分があったりします。

原作では戦闘シーンは完全にカットしていたのですが、今回そのあたりミニ脚本みたいなのを書きました。
格好良く漫画に描いていただけて良かったです。読者にもウィルクの人間兵器っぷりがよく伝わったのではないかと。個人的には二撃目でぶっ飛ぶコマがすごく気に入っています。

これからもウィルクの暴れっぷりは色んな意味で加速していくことになると思うので乞うご期待ですね。

それでは。
漫画版「侯爵嫡男好色物語」を今後ともどうぞよろしくお願いします。

AL





ワイも火を噴きながら回転して
空を飛ぶぐらいやらな
あかんかったですかねえ

ドーモ、読者の皆さん
亀吉です

正式な名前は小説版をどうぞ！

いや～それにしても
派手派手にやられて
しまいましたねえ

あんなチート火力
受けきれんわけじゃないじゃ
ないですかヤダー

ククク…亀吉がやられた
ようだがあいつは
二位の中でも最弱……

まあかく言う私も既に
死んでいるのだが

センパイがた
後のことは我々に任せて
ゆっくりお休みください！

あっ私たちの出番って
何巻先になるんやろ……？

MGC
Beat
SERIES

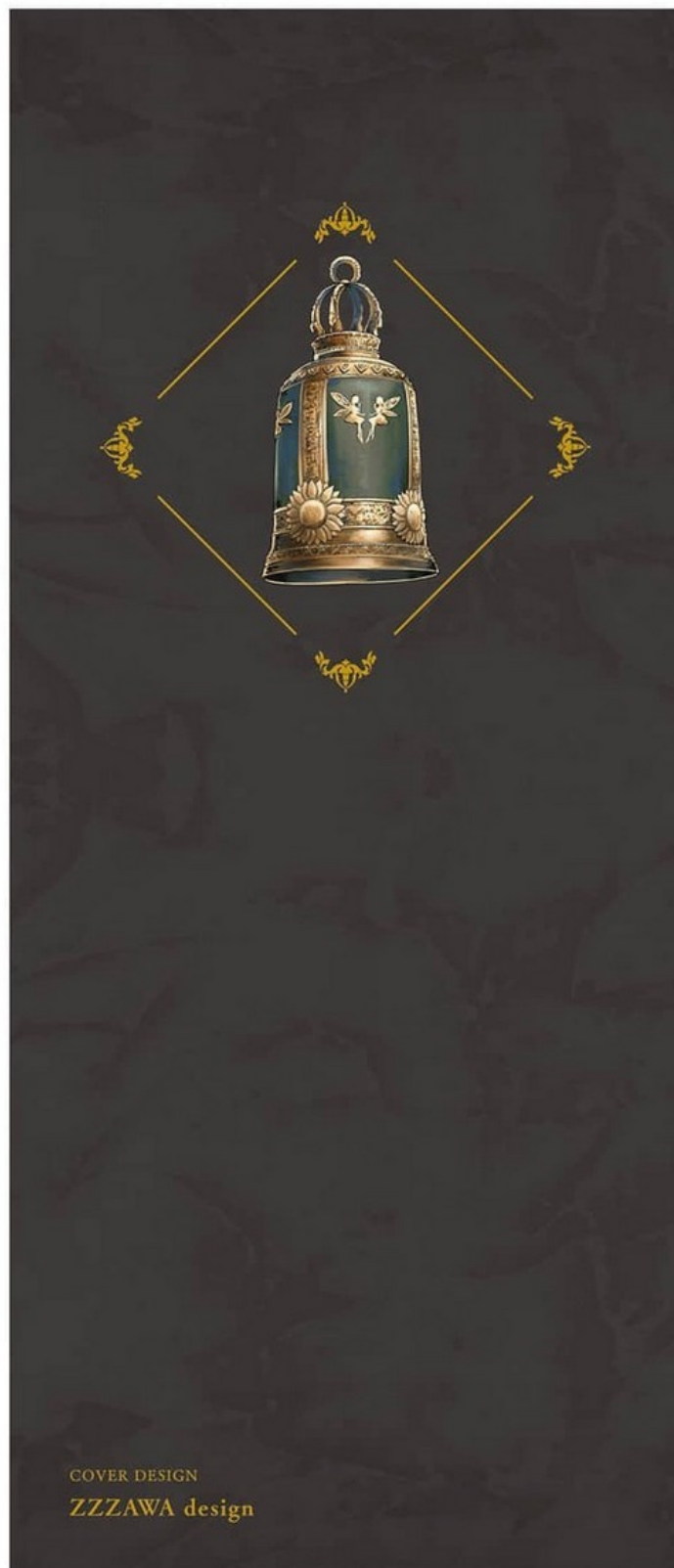
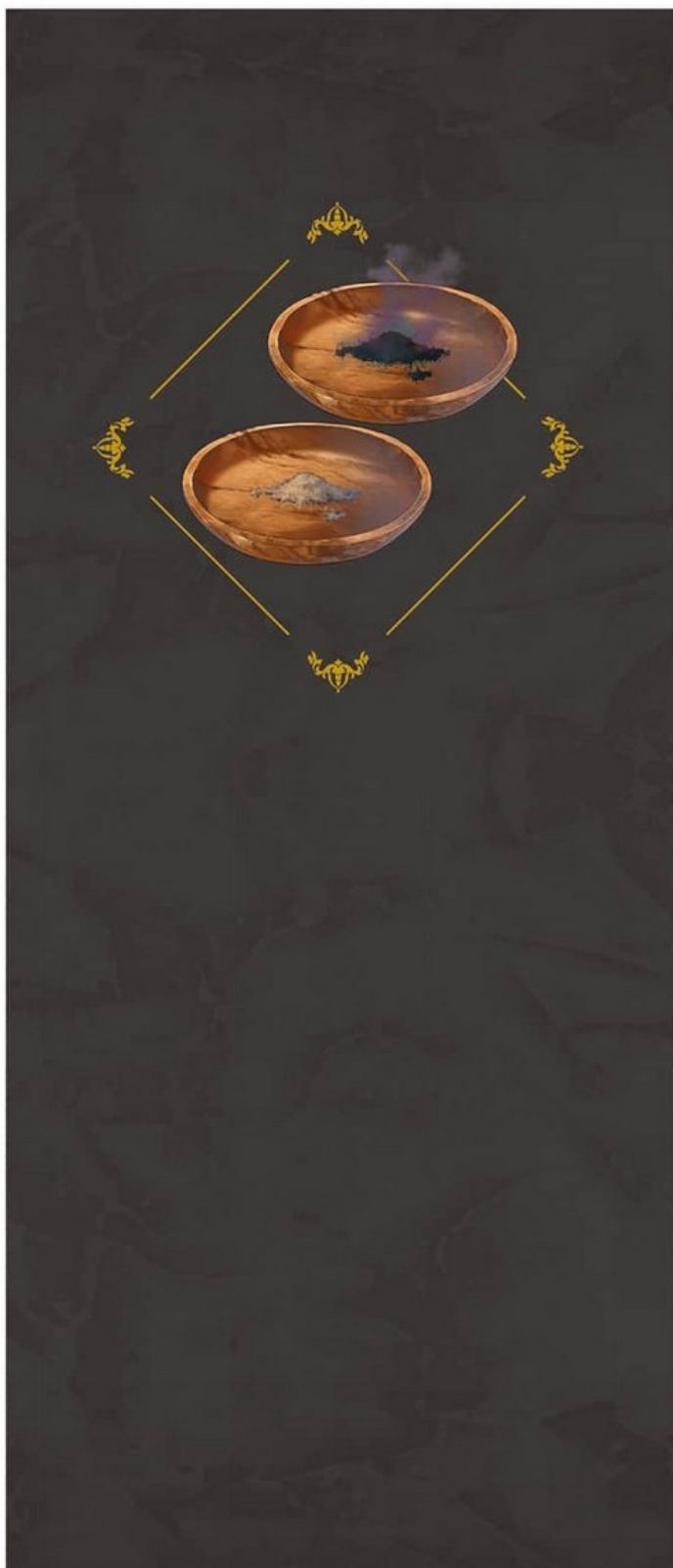
侯爵嫡男好色物語

異世界
ハーレム
英雄戦記

7

原作
AL
漫画
GEN

MAG
Garden



COVER DESIGN
ZZZAWA design



GC
ITES

異世界
物語

作
A
画
GEN
AG
den



やってやって
やりまくる!?

主人公・ウィルクの
異世界ハーレム生活が始まる!!

ニコニコ漫画でも大好評連載中!

毎週月曜日更新! マガコミからお届けする
ファンタジー最前線

マガコミ
MAGCOMI
異世界出張所



https://manga.nicovideo.jp/manga/official/magcomi_isekai/

侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～

原作 AL 漫画 GEN

7



プレミアムな「マンガ」のひとときを
マッグガーデン発 WEBマンガサイト

マガコミ
MAGCOMI

毎週 火・金 曜日更新!
magcomi.com マグコミで検索



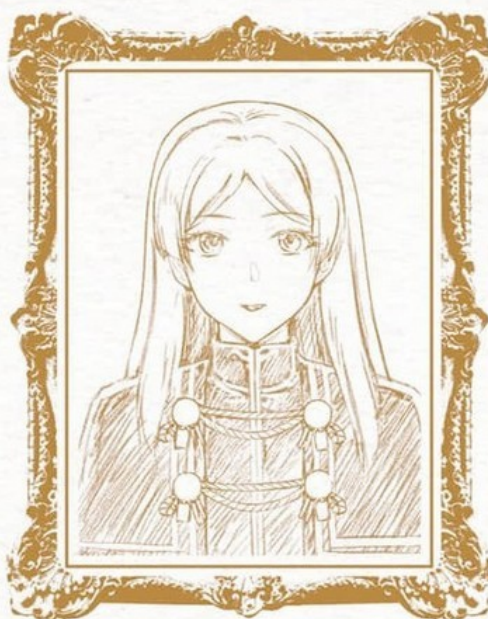
異世界
英雄、**強大な魔獣に**
決戦を挑む!!

シリーズ累計
75万部
突破!!

原作者・AL先生
書き下ろし
SSつき!

今回も大幅加筆修正モリモリ♡

クオルデンツェ・ジルザ



当主就任時のジルザ

クオルデンツェ家第十二代当主。

十代当主オースイトと正妻の間に生まれた長女。戦乱の激しい時代を生きた当主の一人である。

十一代当主であった実兄レドルが遠征中に戦死したため、実父オースイトの後見のもと当主に就任した。

当初は短期的な中継ぎの当主になる予定だったが、レドルの嫡男の生殖能力に問題があったこと、ニューネリー市周辺の戦闘が激しさを増していたこと、一部の高位司祭から強い支持があったことなど、諸般の事情により早期の当主交代は実現していない。

正式な夫との間に二子、愛人関係にあった主祖男性との間に四子をもうけている。

政治思想としてはゼス教聖高会の権威を重視しており、高位司祭同士の政争にも積極的に関わっている。いわゆる「司祭の指示で代理戦争をさせられる貴族」の典型例。そのため司祭社会に存在感を示すことはできたが、度重なる援軍派遣はクオルデンツェ家を大きく疲弊させた。

ゼス教聖高会から任命された役職は正大導師。これは実権を伴わない名誉職を除けば貴族界限における最高役職であるが、戦乱が数十年続いたことでほぼ有名無実と化していたため労力に見合った対価とは言えない。クオルデンツェ歴代当主の中で唯一の被任命者ではある。

高位司祭の推薦を受けて四男イルメスカを十三代当主に指名した……が、当のイルメスカはゼス教聖高会を見限っており、当主交代後は自家の利益のみを求めて侵略戦争に突き進んでいる。実母の持っていた正大導師の名は大義名分作りや対立煽りの道具に都合よく使われ、最後は打ち捨てられた。

「家史」の著者ティフリイの執筆メモには「司祭に踊らされる愚を体現し、ゼス教聖高会に対する失望を家中に印象付けたことがある意味で最大の功績」とある。

妖力



魔獣が体内に宿す生命エネルギーのこと。

魔獣は未熟成熟を問わずこのエネルギーが続く限り活動が続けるが、フィールドを飛び出した後は補給をすることができない。結果として魔獣は寿命を迎えるまでただひたすらに暴れ回ることになる。

人間族で言うところの魔力に似た性質を持っている。例えば、周囲に放つ火炎や雷を纏った尾を使った攻撃、肉体を戦闘に合わせて活性化させる形態変化、大地を穢す汚染物質の拡散など、これらの特殊能力は全て妖力を消費することで実現している。この妖力を用いた攻撃手段は妖撃とも呼ばれる。

なお、妖撃発動が可能な個体は成熟魔獣のみであり未熟魔獣にはできない（肉体にもともと備っていた能力は使える）。

未熟魔獣も大地を汚染するが、これは妖力に満ちた魔獣の体そのものが持つ汚染効果であり妖撃を発動しているわけではない。例えるなら、凍らせたペットボトルを部屋に置いておいたら結露ができて床が濡れるようなものである。

また、妖力は魔力に接触すると激しく反応する性質を持つ。魔獣は妖力の塊のような存在であるため、特に主祖の攻撃魔法は効果抜群である。強く叩き込まれた魔力が内部を侵蝕して魔獣の肉体組織を破壊していく現象を腐蝕反応という。

物質ごとに妖力を通しやすい伝導率のようなものが存在する。エルオ大陸で現在までに発見されているもののうちで最も妖力を通しやすい物質は銀。この性質を利用して銀製の槍を突き刺すことで妖力を体外に放出させ、寿命を縮める討伐テクニックも存在する……が、これは妖力の少ない未熟魔獣にしか通用しない。成熟魔獣の莫大な妖力量の前では銀製武器の妖力放出効果は雀の涙でしかなく、主祖の攻撃魔法がなければ討伐は現実的ではないのである。



侯爵嫡男好色物語 ～異世界ハーレム英雄戦記～ ⑦

2024年11月29日初版発行

■著者

原作:AL 漫画:GEN

©AL ©GEN

■発行人

保坂嘉弘

■発行所

株式会社マッグガーデン

〒102-8019 東京都千代田区五番町6-2 ホーマットホライゾンビル5F

(編集) TEL: 03-3515-3872 FAX: 03-3262-5557

(営業) TEL: 03-3515-3871 FAX: 03-3262-3436

■印刷所

中央精版印刷株式会社

■装幀

ZZZAWA design

■小説レイアウト作成

小椋博之、佐藤由美子

初出／マッグコミ 2024年4月～9月配信分

無断転載・上演・上映・放送を禁じます。

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

但し古書店で購入したものはお取り替えできません。

定価は表紙カバーに表示してあります。

ISBN978-4-8000-1520-4 C9979

Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。